

# 琴村富尼遺跡

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第55集

1995

津山市教育委員会



題字：津山弥生の里文化財センター 岩本えり子

# 野村高尾遺跡

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第55集



1995

津山市教育委員会



## 序

野村高尾遺跡は、「高野ニュー農パーク」の建設に伴い調査された遺跡です。建設予定地内には周知の遺跡は存在せず、またこの付近が戦後間もなく大規模に開墾されていたため、埋蔵文化財が存在する可能性は少ないものの、文化財保護の立場から慎重を期す意味で確認調査を実施した結果、弥生時代の住居址・土壙墓などが遺存していることが明らかになりました。遺跡というものは地表面からの観察だけでは確認することが難しいということを改めて認識させられ、事前の確認調査の必要性を痛感しました。

また野村高尾遺跡においては前述のように住居址・土壙墓などが検出されて美作地方の集落あるいは墓制の研究にとって貴重な資料であると考えていますが、それらは華々しく新聞紙面を飾るような性格のものではありませんでした。しかしながらそれは我々の祖先が長い歴史の中で残してきた貴重な文化遺産であることには変わりはありません。今後ともこれらの遺跡が調査もなされないままに破壊されることのないように、慎重に文化財保護行政を進めてまいりたいと考えています。

なお、最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまで多大なご協力をいただいた関係各位に厚くお礼を申し上げます。

平成7年3月31日

津山市教育委員会  
教育長 藤原修己

## 例　　言

1. 本書は津山市高野ニュー農パーク建設に伴う野村高尾遺跡の発掘調査報告書である。
1. 発掘調査及び報告書作成に要した経費はすべて津山市負担である。
1. 確認調査及び発掘調査は津山市教育委員会主査行田裕美、同主事平岡正宏、同事務員坂本心平が担当した。  
1. 本書に用いたレベル高は海拔である。また方位は平面直角座標系第V系の北である。
1. 本書第2図は建設省国土地理院発行2万5千分の1（津山東部、檣）を複製したものである。
1. 本書には挿図などに遺構の略称を用いている。略称名は次のとおりである。  

S H：住居址 S T：段状遺構 S K：土壙 S G：土壙墓 S X：焼土遺構

  1. 本書の執筆は、行田、平岡、坂本が担当した。
  1. 発掘調査、遺物整理および報告書作成には、津山市シルバー人材センター、文化財センター中山俊紀、安川豊史、小郷利幸、野上恭子、岩本えり子、家元博子各諸氏の協力を得た。
  1. 出土遺物・図面類は、津山弥生の里文化財センターに保管している。

# 本文目次

I 遺跡の立地と周辺の遺跡	
1 遺跡の立地	1
2 周辺の遺跡	1
II 調査の経過	
1 調査にいたる経過	4
2 調査の経過	4
3 調査体制	4
III 調査の記録	
1 弥生時代の遺構と遺物	6
(1) 住居址	6
(2) 段状遺構	10
(3) 土壙	16
(4) 燃土遺構	20
(5) 土壙墓	20
(6) 出土石器	26
(7) 出土玉類	28
2 その他の遺構と遺物	28
VI まとめ	
1 弥生土器の時期について	30
2 弥生時代の遺構について	32

## 挿 図 目 次

第1図 野村高尾遺跡発掘調査区位置図	1
第2図 野村高尾遺跡周辺主要遺跡分布図	2
第3図 野村高尾遺跡遺構全体図	5
第4図 住居址1平・断面図	6
第5図 住居址1出土土器	7
第6図 住居址2、段状遺構3平・断面図	8
第7図 住居址2出土土器・土製品	8
第8図 住居址3平・断面図	9
第9図 住居址4平・断面図	9
第10図 住居址4出土土器	10
第11図 段状遺構1平・断面図、遺物出土状況図	11
第12図 段状遺構1出土土器(1)	12
第13図 段状遺構1出土土器(2)	13
第14図 段状遺構1出土土器(3)	14
第15図 段状遺構2平・断面図	15
第16図 段状遺構3出土土器	15
第17図 土壙1平・断面図	16
第18図 土壙1出土土器	16
第19図 土壙2、土壙3平・断面図	17
第20図 土壙2出土土器	17
第21図 土壙4、土壙5平・断面図	17
第22図 段状遺構2、土壙4、土壙5出土土器	19
第23図 焼土遺構1平・断面図	20
第24図 焼土遺構1出土土器	20
第25図 土壙墓全体図	21
第26図 木棺土壙墓平・断面図(1)	22
第27図 木棺土壙墓平・断面図(2)	23
第28図 木棺土壙墓平・断面図(3)	23
第29図 木棺土壙墓平・断面図(4)	24
第30図 土器棺墓平・断面図	24
第31図 土器棺墓出土土器	25
第32図 出土石器	27
第33図 出土玉類	28
第34図 段状遺構4平・断面図	28
第35図 土壙6平・断面図	29
第36図 土壙7、土壙8平・断面図	29

第37図 土壙8出土土器	29
第38図 弥生時代時期別遺構配置図	31

## 表 目 次

表1 木棺土壙墓一覧表	21
表2 弥生中期土器編年表	30

## 図 版 目 次

図版1—1 住居址1	
2 住居址2	
図版2—1 住居址3	
2 住居址4 (南から)	
図版3—1 段状遺構1	
2 段状遺構1—括遺物出土状況 (東から)	
図版4—1 段状遺構1—括遺物出土状況 (平坦面東部・北から)	
2 段状遺構1—括遺物出土状況 (南壁沿い・東から)	
図版5—1 段状遺構2、土壙1~5	
2 土壙4・5 (南東から)	
図版6—1 土壙1 (南西から)	
2 土壙2・3 (南から)	
図版7—1 土壙2内白色粘土断面 (西から)	
2 土壙墓群全景	
図版8—1 土壙墓群全景 (北東から)	
2 土壙墓11 (南東から)	
図版9—1 土壙墓1 (北東から)	
2 土壙墓5~8 (北西から)	
図版10—1 土壙墓18 (北から)	
2 土壙墓19 (北から)	
図版11—1 土壙6 (北から)	
2 土壙7 (東から)	
図版12—1 土壙8 (東から)	
2 発掘作業風景 (土壙墓群付近)	
図版13 弥生土器 (1)	※図版各遺物の番号は、挿図番号—挿図内番号を示す
図版14 弥生土器 (2)	
図版15 弥生土器 (3)	
図版16 石器、土製品、玉類、須恵器	



## I 遺跡の立地と周辺の遺跡

### 1 遺跡の立地

野村高尾遺跡は岡山県津山市野村889—1番地他に位置する。吉井川の支流加茂川は高野本郷付近で $1.5 \times 3$  kmにわたる広大な沖積地を形成している。遺跡はちょうどこの沖積地のほぼ中央北側の丘陵上に位置する。この丘陵は標高701mの鳥山から南に派生した尾根にあたり、西は高野山西の蟹子川、東は加茂川によって画されている。

遺跡は丘陵の最高所にあたり、標高は175.8mである。高野本郷の平野部との標高差は60m強を測る。

発掘調査対象地は最高所を中心に、東に緩やかに延びた丘陵上にまたがる。両者の比高差は3mである。南側は極端に急峻な地形となっている。

### 2 周辺の遺跡

野村高尾遺跡の周辺には代表的な遺跡が見当たらないので、加茂川流域の河辺、川崎地域まで範囲を広げて概観することにする。

#### 夜半廐寺（第2図2）

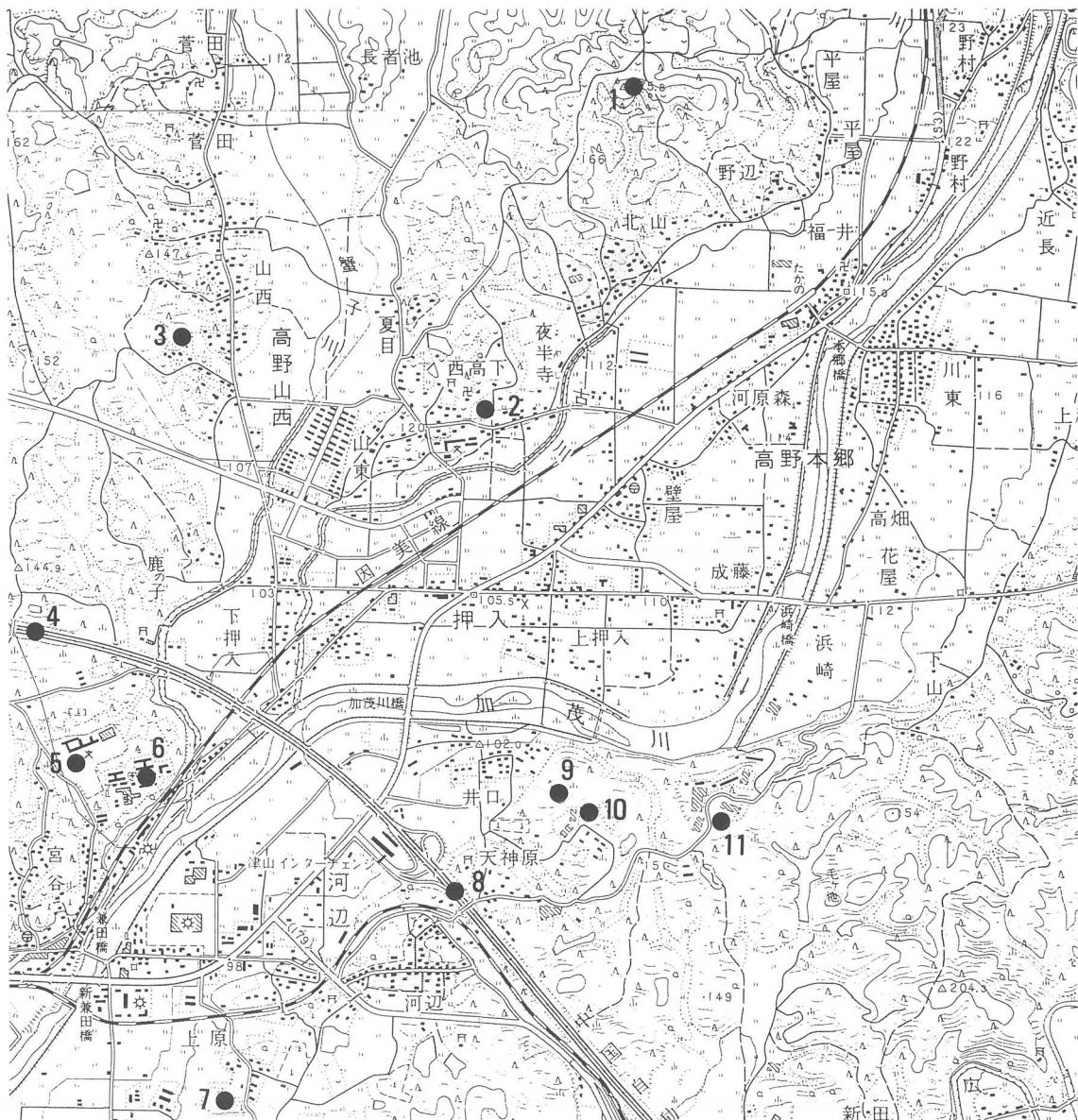
軒丸瓦等が採集されているが、伽藍配置等遺跡の実態は不明のままである。（註1）

#### 正仙塚古墳（第2図3）

全長56mの前方後円墳である。明治16年に発掘され、石棺の中から半円方形帶神獸鏡、変形四獸鏡各1面、勾玉、管玉、鉄斧、土師器片等が出土した。また、人骨2体が出土したとも伝えられている。築造は5世紀前半頃と考えられている。（註2）



第1図 野村高尾遺跡発掘調査区位置図 (S = 1 : 2500)



第2図 野村高尾遺跡周辺主要遺跡分布図 (S = 1 : 25000)

### 押入西遺跡（第2図4）

弥生時代中期後半の集落を中心に古墳時代、奈良時代の遺構が重複する。弥生時代の集落は住居、建物、段状遺構等で構成され、その全容を知ることのできる貴重なものである。古墳時代は1号墳等から出土した陶質土器、奈良時代は製鉄に関連する建物群に特徴づけられる。(註3)

### 狐塚遺跡（第2図5）

6世紀末～7世紀初頭の住居、建物群よりなる。中に鍛冶炉を備えているものがあることや鉄素材、鉄鉱石、フイゴの羽口等の遺物が出土していることから、製鉄ないし鍛冶にかかわった集落と考えられる。(註4)

### 能満寺古墳群（第2図6）

24基よりなる。1基を除き他はすべて6世紀後半から末にかけての群集小古墳である。調査されたE号墳は横穴式石室で、陶棺2基がおさめられていた。金環、管玉等のほかに多数の須恵器が出土している。(註5)

### 河辺上原遺跡（第2図7）

3基の古墳を調査した。このうち1号墳は2度にわたって墳丘を拡大している事が判明し、最終埋葬は礫榔であった。2号墳は木棺直葬3と竪穴式石室1の4主体が確認された。3号墳はかなり破壊を受けていたが、木棺直葬2主体が残存していた。築造時期は6世紀前半から中頃である。（註6）

### 天神原遺跡（第2図8）

弥生時代後期の環濠集落の一部が調査され、住居30軒弱、建物数棟が検出されている。集落のうえには古墳7基が重複していた。木棺直葬墳で6世紀初め頃の築造である。他に20数点の弥生前期の土器も出土している。（註7）

### セウ田1号墳（第2図9）

全長38m、後円部径19.5m、同高さ1.6mの前方後円墳である。墳丘には葺石と考えられる河原石が認められる。埋葬施設、出土遺物は全く知られてなく、所属時期は不明である。（註8）

### 井口車塚古墳（第2図10）

全長35.5m、径30m、高さ5.5mの2段築成の帆立貝形古墳である。中段のテラスには埴輪が配されており、墳丘の周囲には幅2.5～4.5mの周溝が巡っている。所属時期は5世紀末と考えられている。（註9）

### 三毛ヶ池遺跡（第2図11）

弥生時代の墳墓遺跡である。上層と下層に分かれ、下層は中期中頃で34基の埋葬施設よりなる。上層は後期前半で6基の埋葬施設が検出されている。（註10）

(註1) 今井 堯「原始社会から古代国家の形成へ」『津山市史第1巻』 1972

(註2) 湊 哲夫「正仙塚古墳」『岡山県史第18巻考古資料』 1986

(註3) 井上 弘他「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』 岡山県教育委員会 1973

(註4) 河本 清「狐塚遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第2集』 津山市教育委員会 1974

(註5) (註1) 書

(註6) 小郷利幸「河辺上原遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第54集』 河辺上原遺跡発掘調査委員会・津山市教育委員会 1994

(註7) 下澤公明他「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7』 岡山県教育委員会 1975

(註8) 小郷利幸「津山市セウ田古墳群墳丘測量調査報告」『年報津山弥生の里第1号』 津山弥生の里文化財センター 1994

(註9) 小郷利幸「井口車塚古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第52集』 津山市教育委員会 1994

(註10) 小郷利幸「三毛ヶ池遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第48集』 津山市教育委員会 1993

## II 調査の経過

### 1 調査にいたる経過

津山市は農業活性化事業の一環として、津山市野村から高野本郷にまたがる地域に「高野ニュー農パーク」を建設することを決定した。これを受け津山市教育委員会は建設予定地は周知の遺跡ではないが、遺跡の存在が予測されるとの判断から事前に確認調査を実施することを決定した。当然、調査費用は津山市負担である。

確認調査は平成6年4月26日～28日までの3日間実施した。その結果、住居址・土壙墓等の遺構が存在することが判明した。これを受け、津山市教育委員会は津山市に対して文化財保護法第57条の6第1項にもとづく遺跡発見通知、及び第57条の3第1項にもとづく埋蔵文化財発掘通知の提出を求めた。早速、津山市から5月13日付、津産整第22号で津山市長永礼達造から文化庁長官宛に遺跡発見通知、埋蔵文化財発掘通知が提出された。と同時に津山市教育委員会は5月20日付、津教委文第25号で文化財保護法第98条の2第1項にもとづき埋蔵文化財発掘調査通知を提出し、6月1日から本調査に着手した。

### 2 調査の経過

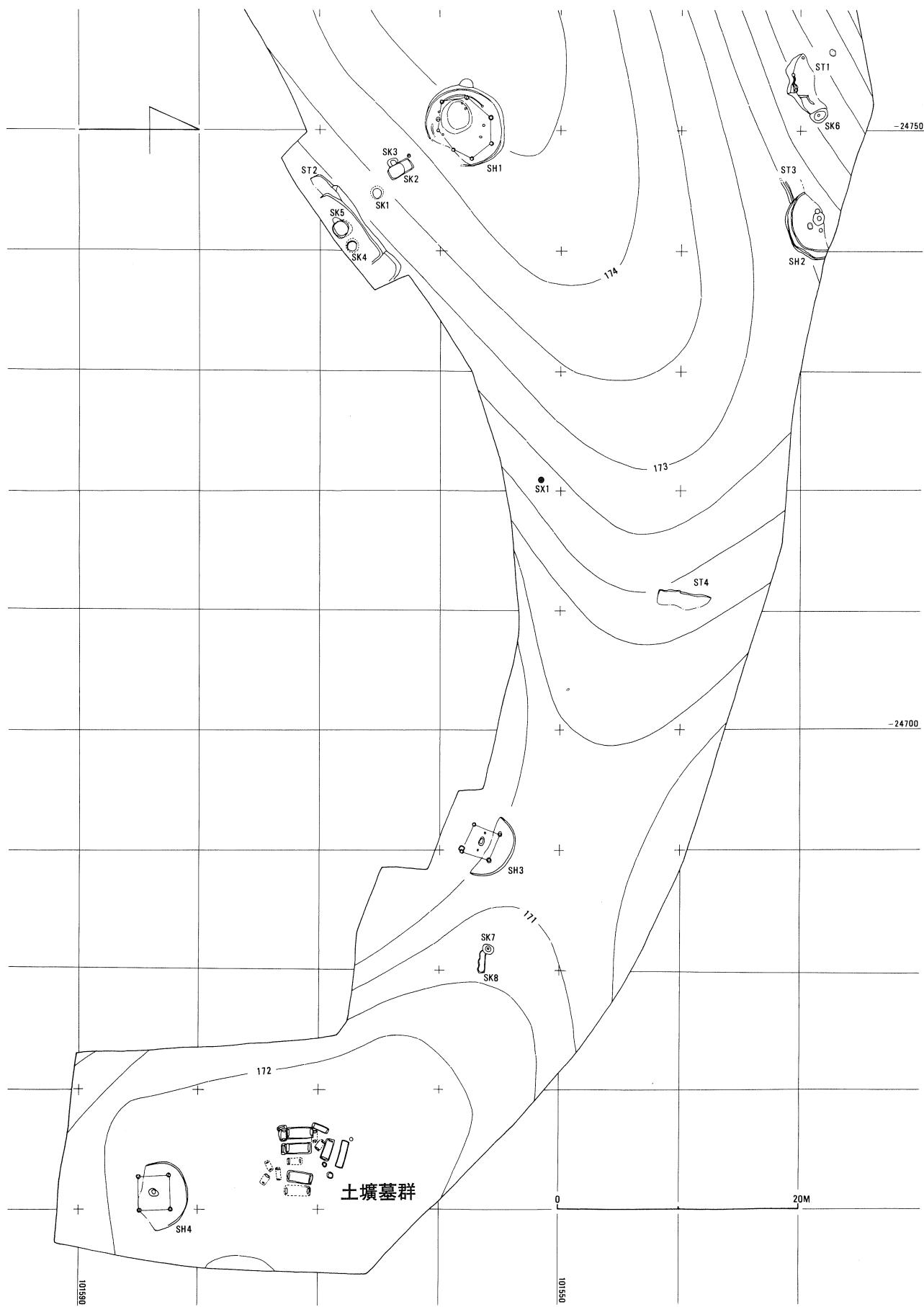
発掘調査は、平成6年6月1日に着手し、バックホーによる表土剥ぎから開始した。6月6日からは作業員を動員し、住居址1から作業に着手した。調査区の西側から東側へ、順次清掃、検出、各遺構の掘り下げを繰り返しながら発掘作業を進行した。6月30日から土壙墓群の掘り下げにかかり、7月7日に遺跡内のすべての遺構を完掘した。ラジコンヘリコプターによる航空写真撮影、地形測量を終え、現地でのすべての作業が終了したのが7月12日である。

### 3 調査体制

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は下記のとおりである。

発掘調査主体	津山市教育委員会	教育長	藤原修己
		教育次長	内田康雄
		文化課長	糸山三千穂
		文化財センター所長	神田久遠
		〃 次長	中山俊紀
(調査担当)	〃	主査	行田裕美
〃	〃	主事	平岡正宏
〃	〃	事務員	坂本心平
(整理担当)	行田裕美	平岡正宏	坂本心平
(発掘作業員)	津山市シルバー人材センター	梶尾嘉明	梶岡貞知
		梶岡辰男	高山守
		谷口末男	
	前田一	真木均	水島友一
		森二三男	

なお、発掘調査から報告書作成に至るまで、多くの方々の指導、助言、協力を得た。厚く御礼申し上げます。



第3図 野村高尾遺跡遺構全体図 (S = 1 : 400)

### III 調査の記録

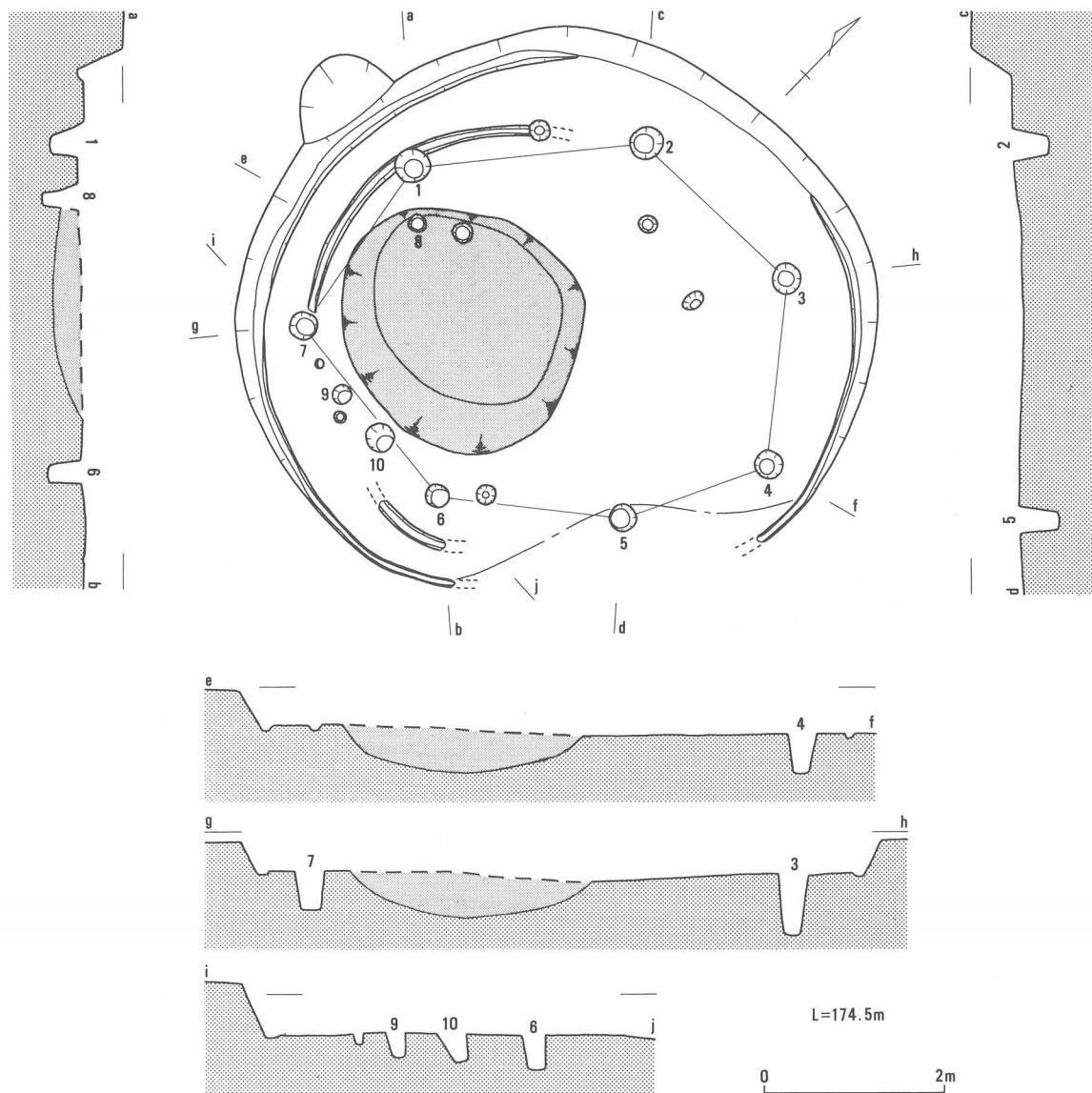
#### 1 弥生時代の遺構と遺物

野村高尾遺跡からは、弥生時代の遺構として住居址4軒、段状遺構3基、土壙5基、土壙墓19基の他、炭化物と土器を伴う焼土面が検出されている。

##### (1) 住居址

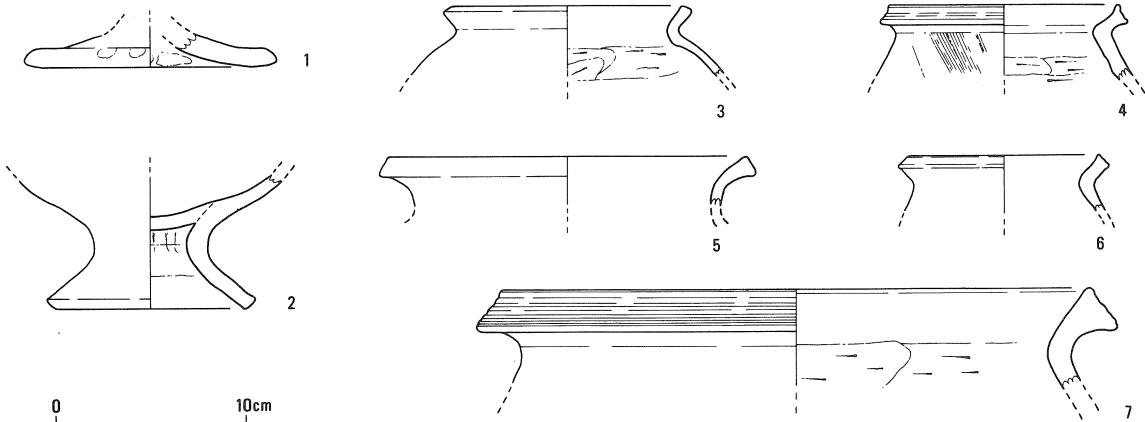
###### 住居址1 (第4図)

調査区西側、南西にのびる丘陵のほぼ頂部に位置する。床面の中央部から南東寄りの一部で、近年の乱掘により床面が破壊されている。一度建て替えが行われており、2時期が認められる。最初の住居は残存する壁体溝から、床面で径4.7m前後の円形と推定される。柱穴の構成は不明である。拡張時のものは、床面で長径6.5m、短径約6mを測る橢円形を呈する。7本柱の住居と考えられるが、床面には



第4図 住居址1平・断面図 ( $S = 1 : 80$ )

なお複数の性格不明のピットが認められる。他の住居址とともに、柱穴は非常に硬い地山層を掘り下げて設けられている。住居の東側に突出するように掘り込みが認められるが、この住居に伴うものであるのか、別遺構が切り合っているのかは明らかでない。遺物は、弥生土器片が小型のポリ袋1袋分とガラス玉2点が出土した。



第5図 住居址1出土土器 ( $S = 1 : 4$ )

#### 住居址1出土土器 (第5図)

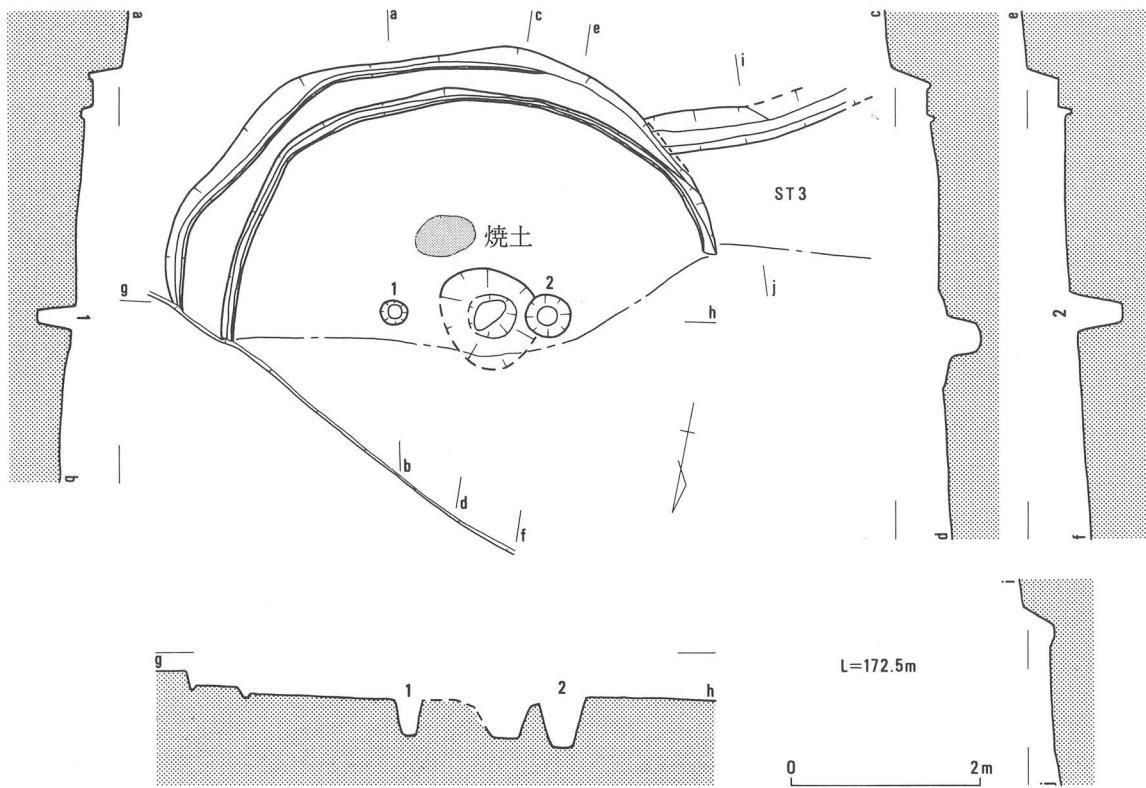
1は蓋形土器である。内面、外面ともに指によるナデ仕上げで、指頭圧痕が認められる。2は台付鉢形土器である。脚部内面には、しづら痕跡が認められる。3～7は甕形土器である。いずれも頸部から「L」字状に外反する口縁部をもち、内傾する端面をもつ。3・6のように口縁端部を肥厚しないものと、4・5・7のように下方または上下両方向に肥厚または拡張するものの両者がみられる。4・7は、端面にそれぞれ2条、5条の凹線文をもつが、いずれもかなり退化したものである。3は頸部から急に張り出す胴部をもつ器形である。3・7は胴部内面に横方向右向きのヘラケズリを頸部付近まで施す。4は胴部外面をハケ調整により仕上げ、内面は横方向左向きのヘラケズリを胴部上部まで施す。

#### 住居址2 (第6図)

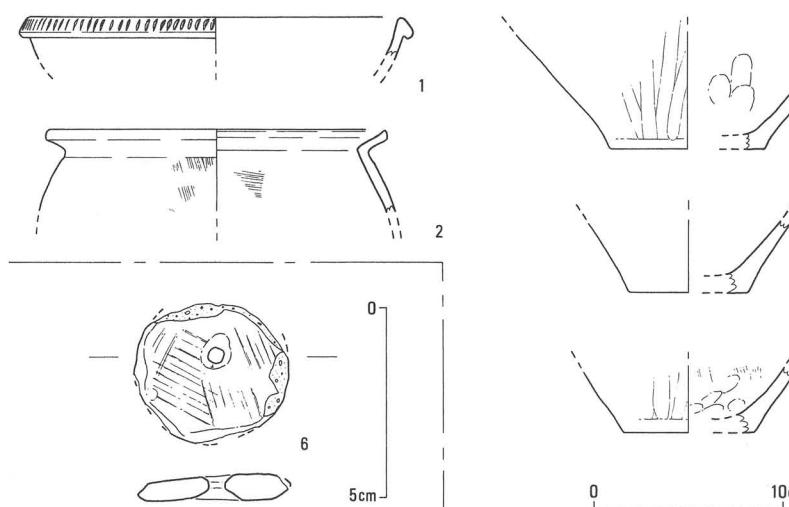
調査区北西部、南西にのびる丘陵の北東側斜面に位置する。住居址1同様一度拡張が行われており、2時期が認められる。最初の住居は床面で径5.0mの円形プランに、拡張時のものは床面径5.5mの不整円形に復元される。いずれの時期も2本柱で、主柱穴、中央穴とも共有する。住居の西側部分では2時期で壁体溝も共有している。主柱穴は中央穴をはさんでほぼ東西方向に配される。中央穴は径約1.1m、深さ約40cmの不整円形の2段掘りで、その南東側には60cm×45cm程の範囲で赤化した焼土面が認められる。遺物は、弥生土器片が小型のポリ袋1袋分と、土器片利用の紡錘車、磨製石斧、ハンマーストーン各1点が出土した。またサヌカイト剝片、碎片若干量が出土していることから、本住居内において石器製作が行われていたことがうかがわれる。

#### 住居址2出土土器・土製品 (第7図)

1は高杯形土器の杯部である。口縁端部はやや下方に垂れ下がり、内傾する端面には、斜方向の刻目文を連続して施す。2は甕形土器である。頸部から「L」字状に外反する口縁部をもつ。端部は肥厚せず、やや上方につまみ上げる。内面、外面ともハケ調整によって仕上げる。3～5は甕形土器または壺形土器の底部である。3・5の外面はヘラミガキで下端部を横にナデしている。内面調整は、3はナデ仕



第6図 住居址2、段状遺構3平・断面図 (S = 1 : 80)



上げで指頭圧痕を残し、5はハケ調整で底部に指頭圧痕が残る。6は土器片を利用した紡錘車である。外面にはハケメが残存している。内面、外面の両方向から穿孔が行われている。

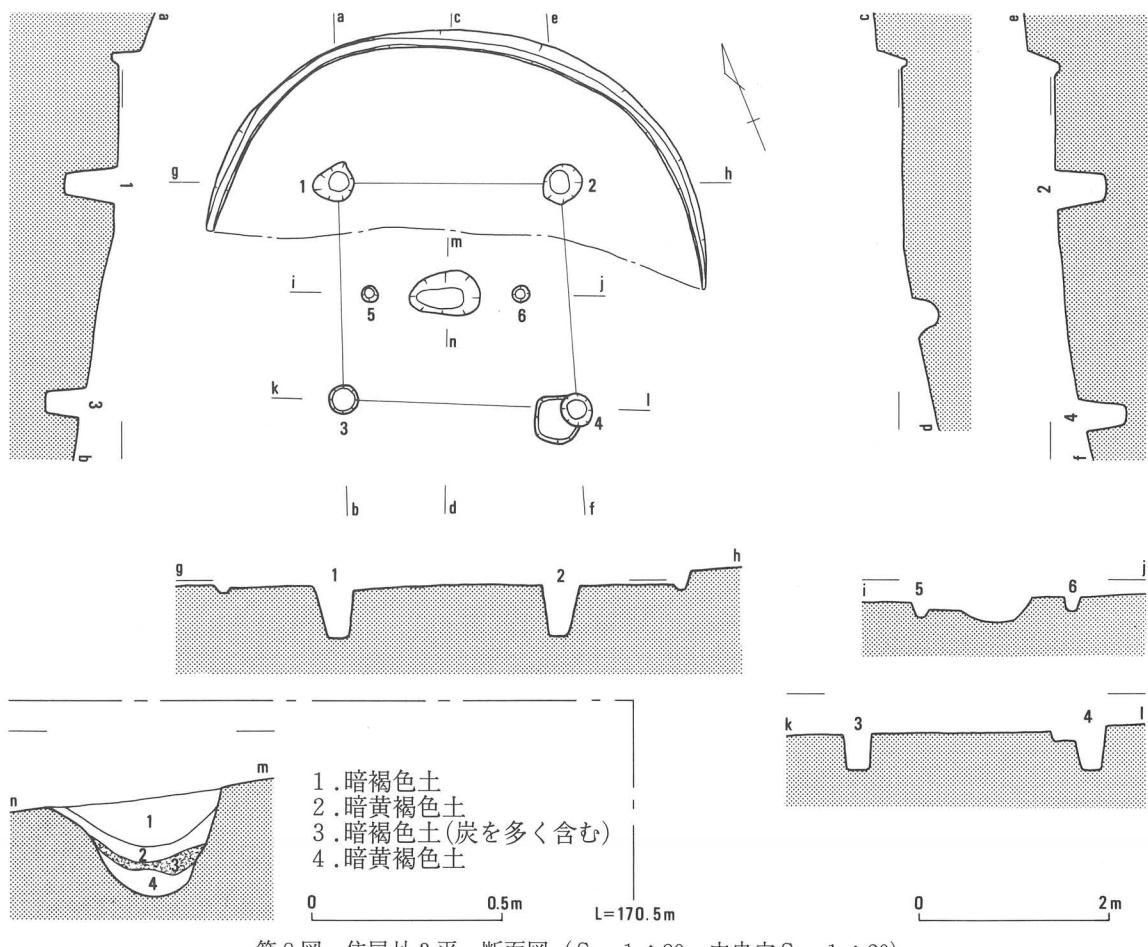
第7図 住居址2出土土器・土製品 (1~5 S = 1 : 4、6 S = 1 : 2)

### 住居址3 (第8図)

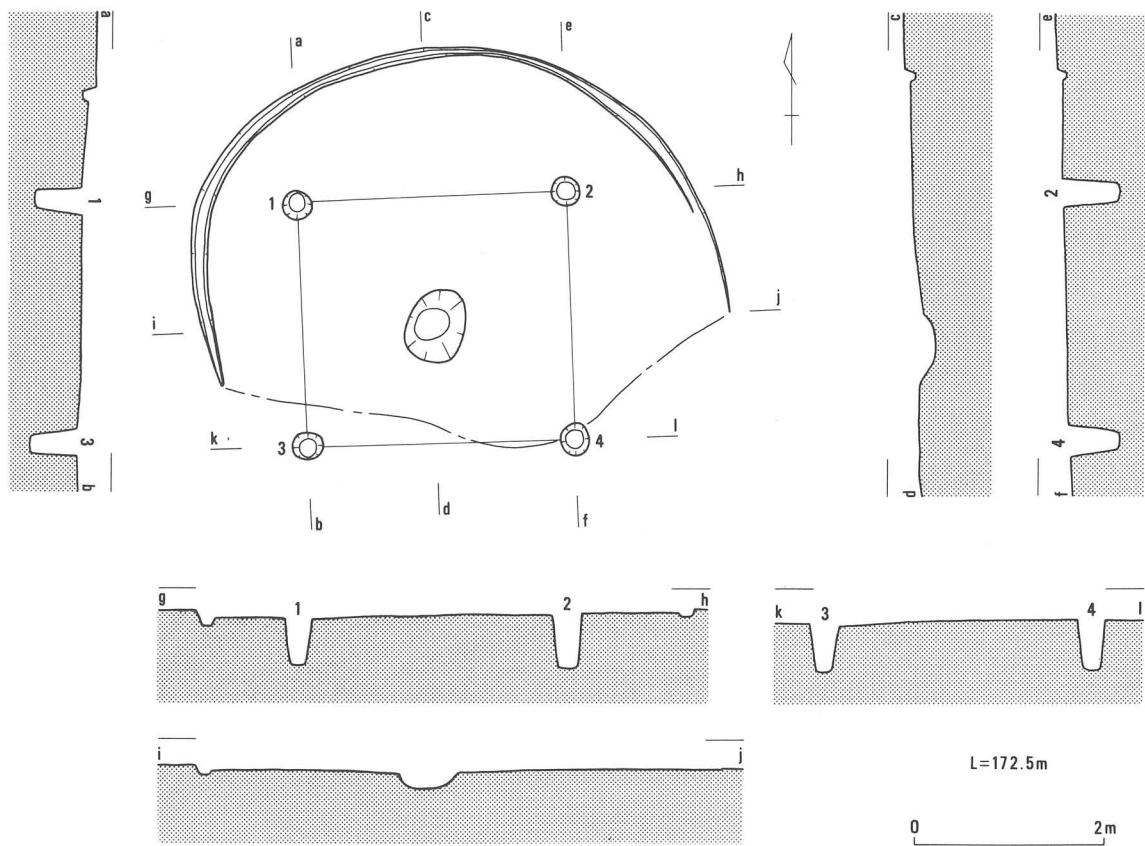
調査区の中央部東寄り、鞍部からやや南に下がった斜面に位置する。住居は、床面で径5.2mの円形プランに復元される。4本柱の住居である。床面中央に径64cm×48cm、深さが復元で約40cmの楕円形の中央穴が位置し、その長軸方向の両側に小ピットを配する。中央穴下部には炭化物を多量に含む暗褐色の層(3層)が認められ、中央穴での火の使用の状況をよく示している。弥生土器片若干量が出土した。

### 住居址4 (第9図)

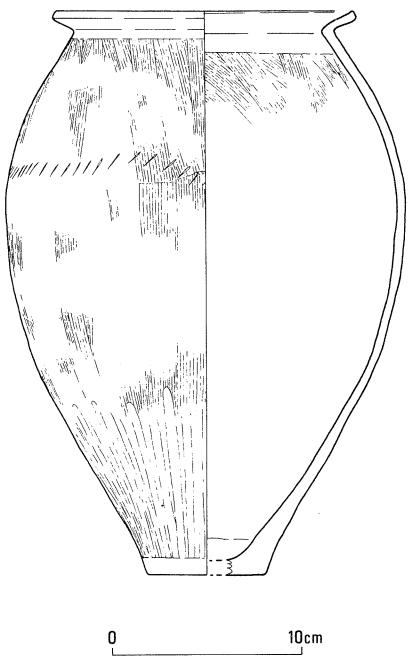
調査区の東端付近、南東にのびる丘陵の頂部に近い平坦面上やや南寄りに位置する。土塙墓群の南側



第8図 住居址3平・断面図 (S = 1 : 80 中央穴S = 1 : 20)



第9図 住居址4平・断面図 (S = 1 : 80)



第10図 住居址4出土土器 ( $S = 1 : 4$ )

## (2) 段状遺構

### 段状遺構1 (第11図)

調査区西側、南西にのびる丘陵の北東側斜面に位置する。住居址2の西側に近接する位置である。丘陵斜面を削平し、長さ約5m、幅が最大で約1.8mの不整な半月型の平坦面を形成している。平坦面の南側に、壁に沿って3個の小ピットが認められ、小ピット1～2の間には壁体溝が検出された。小ピット1の南側と平坦面の東側にはテラスが付設される。前者は長さ90cm、最大幅30cmの三角形状を呈し、地山層を削って形成されている。後者は、地山層を削って形成された初期のテラス(図の点線部分)を、後に盛土によって拡張した状況がうかがえる。初期のテラスは平坦面の長さ140cm、幅20～30cm、拡張後のものは長さ180cm、幅50～60cmを測る。平坦面の中央部付近には炭化物の集中する部分が認められる。大形の炭化材が検出され、壁面、遺物に熱を受けた痕跡が認められることから、火災に遭ったものと思われる。また、平坦面の西端から北へ2.4m程の斜面上に、50cm×60cmの範囲で焼土および炭化物の集中が認められる。遺物は、弥生土器片がコンテナー2箱分、磨製石庖丁、叩き石各1点が出土した。

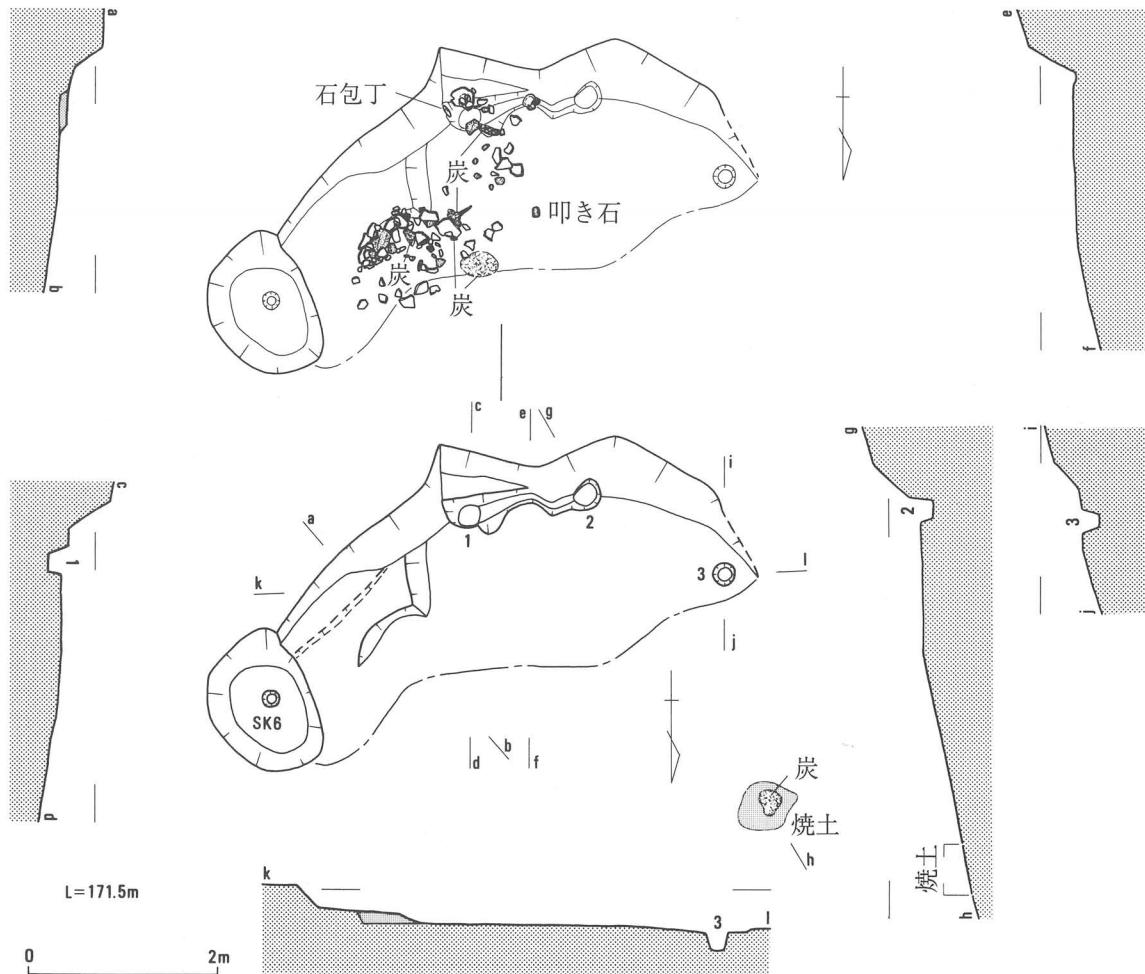
### 段状遺構1出土土器 (第12図、第13図、第14図)

1～4は高杯形土器である。杯部はいずれも椀状を呈する。口縁端部は、1・3のように水平～やや内傾する端面をもち、両側にやや拡張するものと、2のようにほぼ水平な端面を外側に拡張し、端が下方に垂れ下がるものがある。2の外側の端面はやや凹面になり、斜め方向の刻目文を連続して施した上から円形浮文で加飾している。1は、杯部外面では斜方向のハケ調整の上から下側を縦方向のヘラミガキで仕上げる。脚部は縦方向のハケ調整を下部で横にナデ消している。2は、外面上半はハケ調整、下半は横方向のヘラミガキで仕上げる。内面は斜方向のハケ調整に一部横方向のヘラミガキを交える。3は外側が縦方向のハケ調整、内面は横方向のヘラミガキにより仕上げられている。4は、脚部上部に3条の断面三角形の貼り付け凸帯をめぐらせる。杯部外面はハケ調整の上から縦方向のヘラミガキで仕上げ、内面は横方向のヘラミガキを施す。5～17は甕形土器である。口縁部径30cm前後の大型のものと、

に近接する位置である。住居は、床面で径5.3mの不整円形のプランに復元される。4本柱の住居で、4つの主柱穴の中央に中央穴が位置する。中央穴は径80cm×60cm深さ約15cmの楕円形を呈する。遺物は、弥生土器片が小型のポリ袋1袋分出土した。

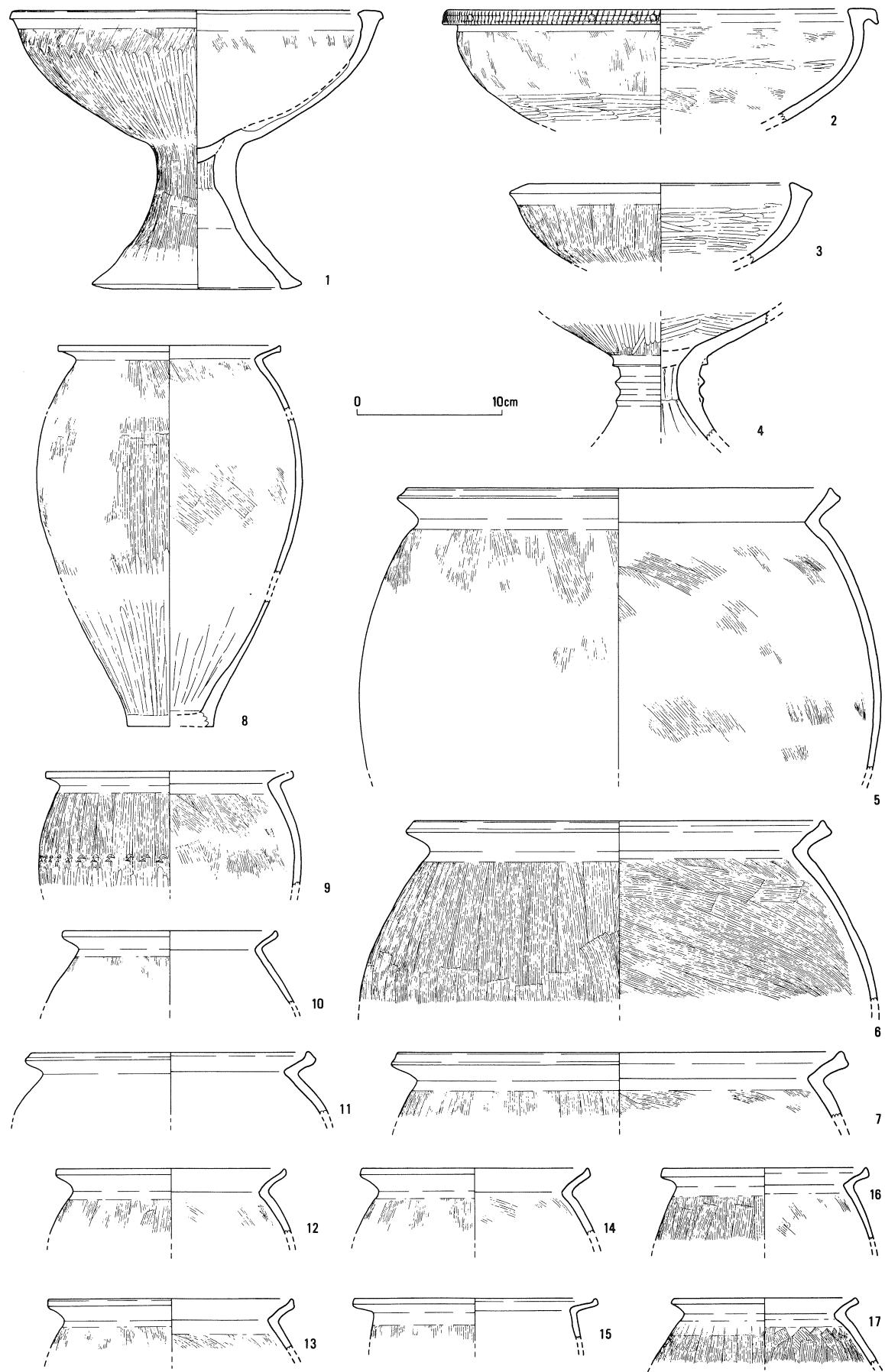
### 住居址4出土土器 (第10図)

甕形土器である。頸部から「L」字状に外反する口縁部をもつ。端部は肥厚せず、上方にややつまみ上げる。胴部上部には斜方向の刻目文を連続して施す。胴部外面上側と内面上部はハケ調整で、内面下側の大部分はナデによって仕上げられている。胴部外面下部はヘラミガキによって仕上げるが、下端は横にナデしているようである。

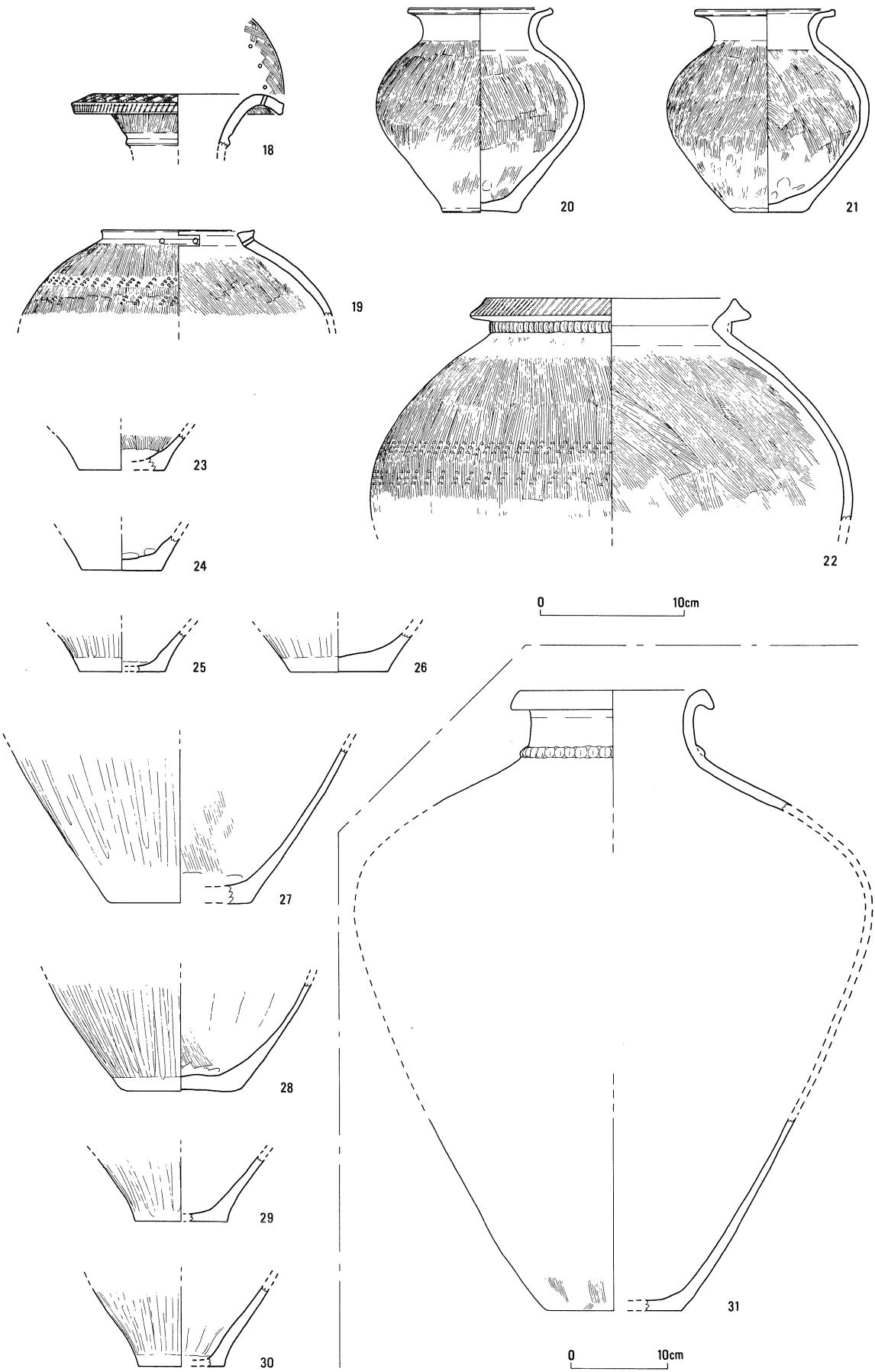


第11図 段状遺構1平・断面図、遺物出土状況図 (S = 1 : 80)

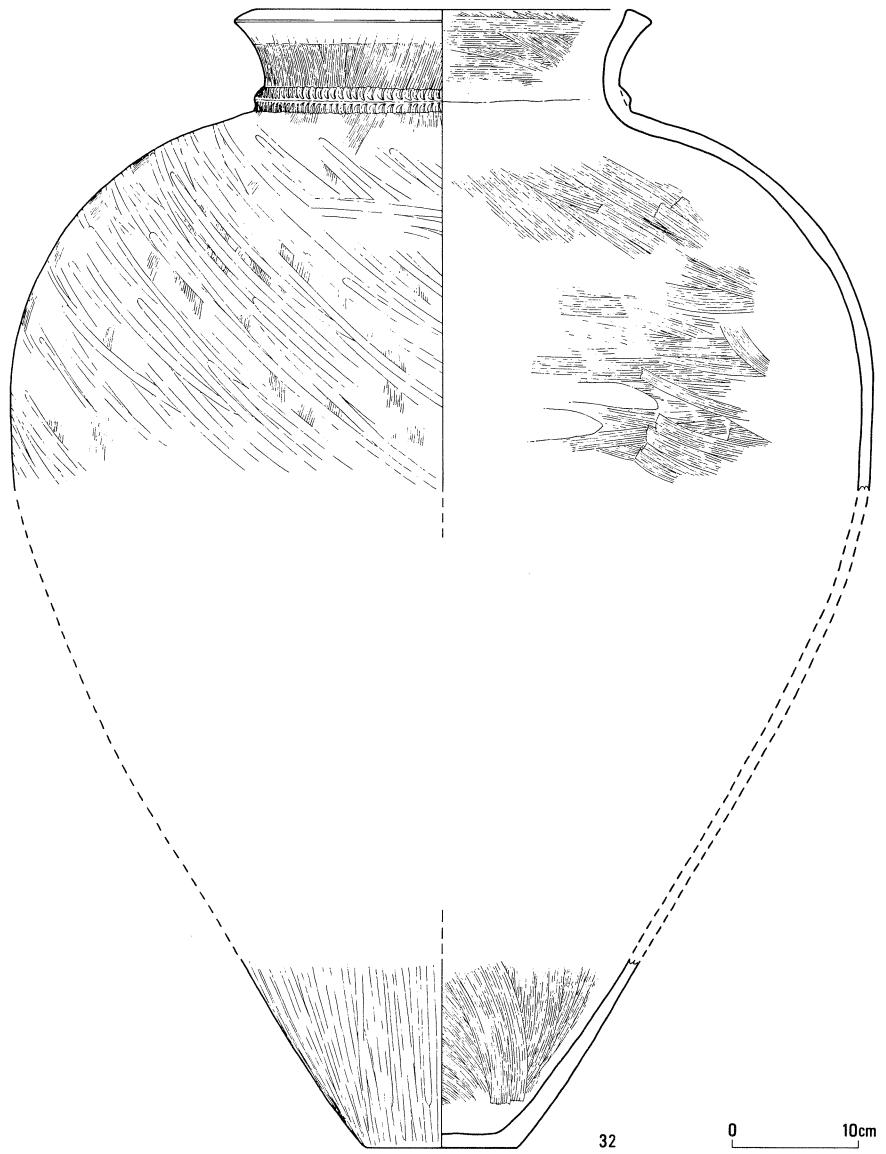
13~20cmの中・小型のものがある。いずれも頸部から「L」字状に外反する口縁部をもつ。大型のものは端部を上方にややつまみ上げ、内傾する端面をもつ。端面はやや強くナデて、凹面を呈する。中・小型のものはほとんどのものが端部をやや上方につまみ上げるが、このうち11・13は大型のもの同様端面が凹面を呈している。胴部上部の調整は、大型、中・小型とも基本的に外面は縦方向のハケ調整、内面は右下りの斜方向のハケ調整である。17は外面上部のハケ調整をやや広く横にナデ消し、内面は斜方向のハケ調整の上から縦方向のハケ調整を施す。9は、最大径部付近に二重の波状の刻目文を連続してめぐらせ、その下側からはヘラミガキによる仕上げを行っている。18~22・31・32は壺形土器である。18は、上方に開く頸部からやや下がりながら外側へ開く口縁部をもつ。端部は凹面を呈し、斜方向の刻目文を連続してめぐらせる。口縁部の下面是ハケ調整が、上面には交差する櫛描直線文が施され、上面から下面へ穿孔が連続して行われる。頸部には凹線文がめぐるが、それらの間には鋭い稜が形成される。19はごく短く上方に立ち上がる口縁部から急に張り出す胴部をもつ器形である。胴部上端付近に2個並ぶ穿孔が外側から内側へ行われる。口縁部は、穿孔の上端ラインにあたる位置に沿って貼り付けられたものである。外面には胴部上部に3個1組の連続する刺突文が2段にめぐる。このうち上段のものはハケ調整をナデ消した上から施されている。20・21は器形、大きさ、調整、胎土、焼成とも非常に似通っている。胴部から垂直に緩やかに立ち上がる頸部をもち、口縁部は外反して横に開く。端部はやや上方につまみ上げる。胴部外面には左下がりの、内面には右下りのそれぞれ斜方向のハケ調整が施される。底部内面付近はいずれも成形時の面を残し、指頭圧痕が認められる。22は頸部から「L」字状に外反す



第12図 段状遺構1出土土器 (1) (S = 1 : 4)



第13図 段状遺構1出土土器 (2) (18~30 S=1:4、31 S=1:6)



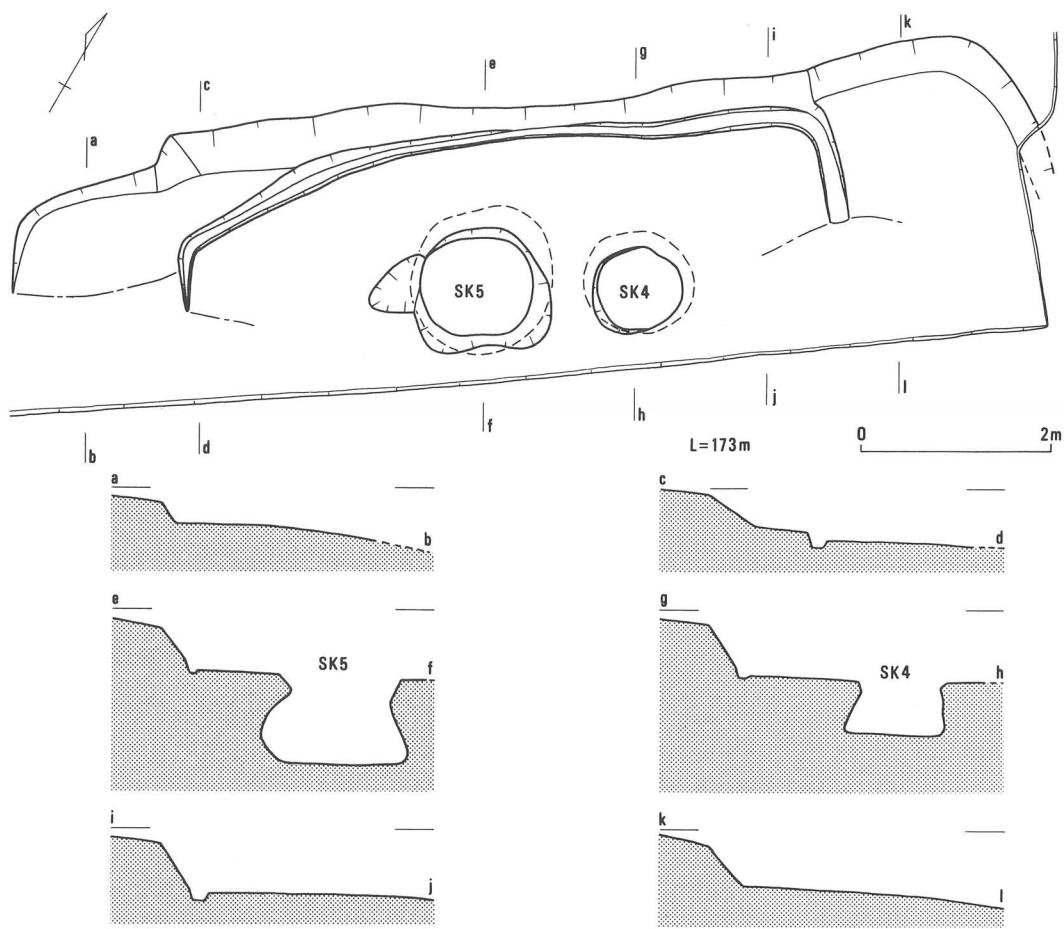
第14図 段状遺構1出土土器（3）（S=1:6）

る口縁部をもつ。端部は上下両方向に肥厚する。内傾し、凹面を呈する端面には斜方向の刻目文が連続してめぐる。頸部には、貼り付け凸帯の上から指による押圧文が施される。胴部には、最大径部付近に3個1組の連続刺突文が2段にめぐる。胴部上端付近では、縦方向のハケ調整をやや広く横にナデ消している。31・32は特に大型のものである。31は胴部から垂直に緩やかに立ち上がる頸部をもつ。口縁部は外反し、端部は下方に垂れ下がる。全体に遺存状態が悪く、細かな観察は不可能である。

が、口縁端面には凹線文、刻目文、円形浮文などが施されていたものと推測される。頸部では、貼り付け凸帯の上に指による押圧文をめぐらせる。胴部外面にはわずかにハケ調整が残る。32は、胴部から「L」字状に緩やかに外反する口縁部をもつ。胴部は口縁部から急に張り出し、最大径が上部にくる器形である。頸部には貼り付け凸帯が付され、その上に指による押圧文を2段に施す。外面の調整は、口縁部では斜方向のハケ調整を上部で横にナデ消し、胴部上半は縦方向のハケ調整の上から斜方向に一部横方向を交えたヘラミガキで仕上げる。底部外面は縦方向のヘラミガキである。内面の調整は、口縁部では横または斜方向のハケ調整、肩部は斜方向のハケ調整、胴部中部は横方向のハケ調整を一部で上からナデしている。底部内面は斜方向のハケ調整である。23～30は壺形土器または甕形土器の底部である。基本的には外面を縦方向のヘラミガキで仕上げ、下端を横にナデ消すようである。内面は底部付近までハケ調整を施すものもあるが、基本的には胴部下部までナデしているようである。

## 段状遺構2（第15図）

住居址1の南東約10m、南西にのびる丘陵の南東斜面上に位置する。丘陵斜面を削平し、長さ約11m



第15図 段状遺構2平・断面図 ( $S = 1 : 80$ )

幅約2mの平坦面を形成している。平坦面の中央部付近には2基の袋状ピット（土壌4、土壌5）が配され、その三方を「U」字状に囲むように壁沿いに長さ約7mの範囲で溝が検出された。溝は両側に平坦面を残すように配され、このうち西側の平坦面はテラス状に一段高くなっている。遺構の平坦面からは若干量の弥生土器片が出土した。

#### 段状遺構2出土土器（第22図1～4）

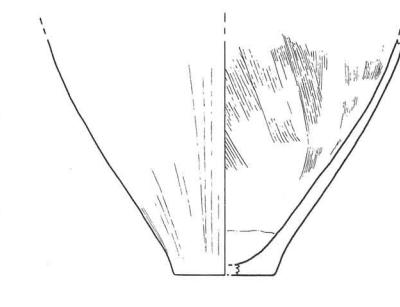
1～4は壺形土器または甕形土器の底部である。外面は、1はヘラミガキ、4は下端までハケ調整で仕上げる。内面は、1はナデ、2～4はヘラケズリにより仕上げている。

#### 段状遺構3（第6図）

南西にのびる丘陵の北東側斜面、住居址2の西側に重複して位置する。斜面を削平し、幅1.2m～1.6mの平坦面を形成している。壁に沿って壁体溝を配している。遺物は、壺形土器または甕形土器の底部片が1個体分出土した。

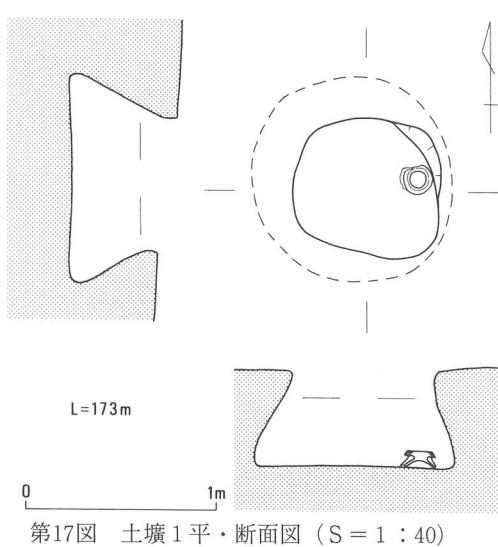
#### 段状遺構3出土土器（第16図）

壺形土器または甕形土器の底部である。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は胴部下半は斜方向のハケ調整、胴部下部～底部はナ



第16図 段状遺構3出土土器  
( $S = 1 : 4$ )

デによって仕上げる。



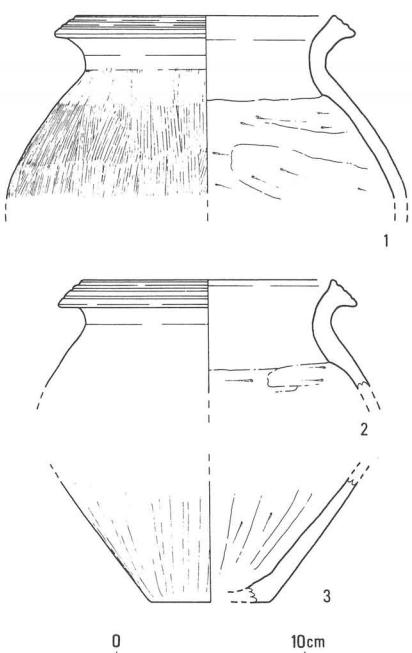
### (3) 土壙

#### 土壙1 (第17図)

南西にのびる丘陵の南東斜面上、住居址1と段状遺構2との間に位置する。上面最大径約85cm、床面最大径約115cm、深さ約55cmの断面フラスコ状を呈する土壙である。遺物は弥生土器片が小型のポリ袋1袋分出土した。

#### 土壙1出土土器 (第18図)

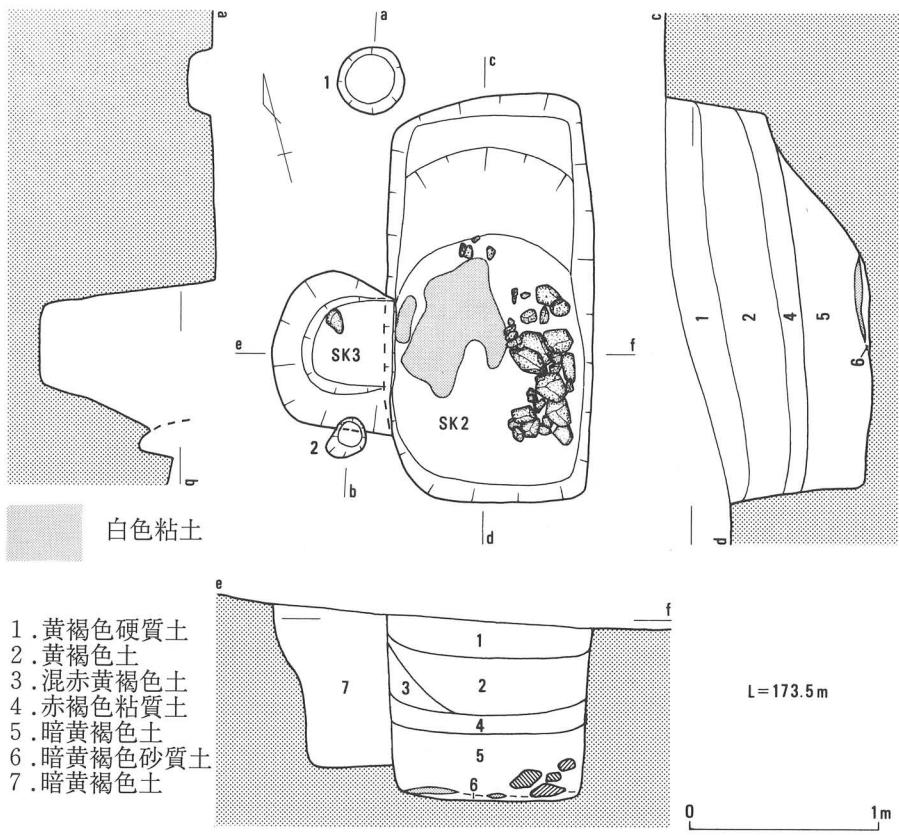
1・2は甕形土器である。いずれも頸部からやや緩やかに「L」字状に外反する口縁部をもつ。端部は、1は下方に、2は上下両方にやや拡張する。端面にはいずれも3条の凹線をめぐらせる。1は胴部外面に縦方向のハケ調整を施し、上端付近をやや広く横にナデ消す。内面は左方向のヘラケズリで仕上げる。2は遺存状態が悪く、外面調整は不明であるが、内面は右方向のヘラケズリ仕上げである。3は壺形土器または甕形土器の底部である。外面は縦方向のヘラミガキ仕上げ、内面は上にケズリ上げる。



色粘土の分布がみられる。白色粘土は厚さ2.5cm程で断面はレンズ状を呈し、1mm以下の砂粒を多く含む。土壙の西側には長辺に沿って2基の小ピットが配される。遺物は、1層下部から弥生土器片若干量が出土壤しているが、土壙上部の埋土中からの出土であり、この土壙に伴うものではないと考えられる。

#### 土壙2出土土器 (第20図)

1は器種は不明であるが、壺形土器あるいは器台形土器とみられる破片である。外面には2条の断面三角形の貼り付け凸帯をめぐらせ、沈線風の直線文が3条めぐらされる。内面は成形時の面を残し、指頭圧痕がみられる。2は壺形土器または甕形土器の底部である。外面はナデ仕上げ、内面調整は遺存状態が悪く明らかでない。



第19図 土壌2、土壌3平・断面図 ( $S = 1 : 40$ )

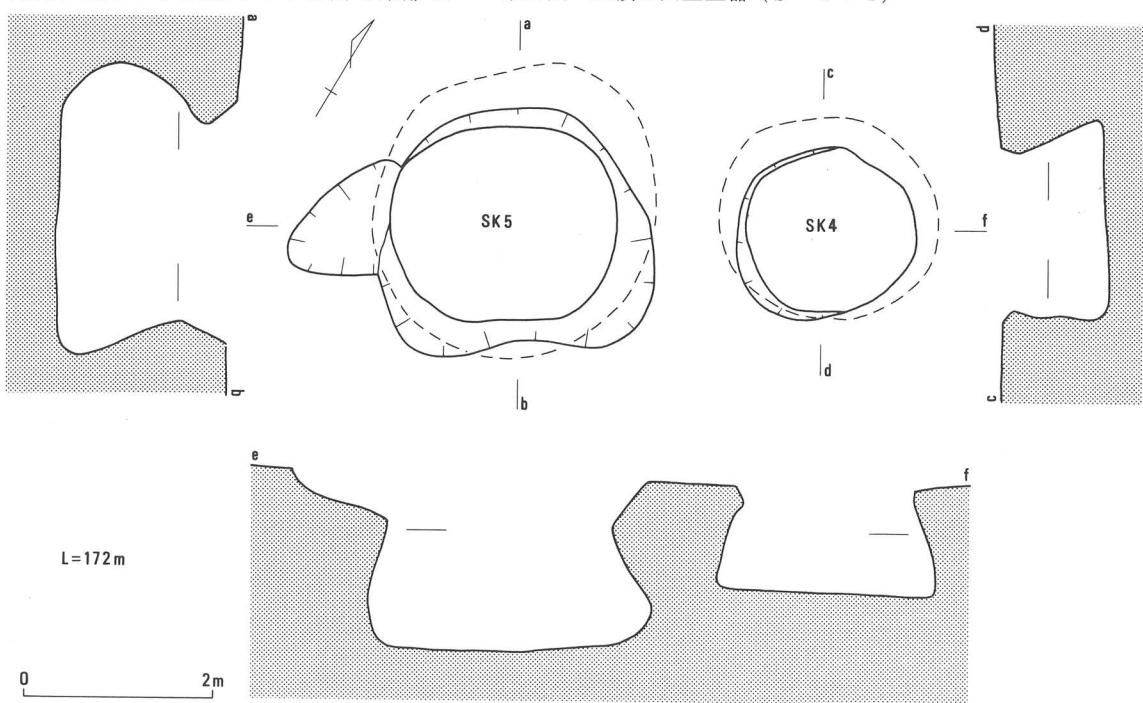
#### 土壌3 (第19図)

土壌2の西側に切り合って位置する。現存する部分では、上面で径約85cm深さ約95cmを測る。この土壌の埋土は土壌2、小ピット2に切られしており、これらよりも時期は遡る。

底面から拳大の礫1点が検出されたほかは、遺物は出土していない。

#### 土壌4 (第21図)

土壌4、土壌5はいずれも段状遺構2の平坦面に配されたものである。2基の土壌は、段状遺構2の北西壁に平行する方向に配され、上面での中心間の距離は



第21図 土壌4、土壌5平・断面図 ( $S = 1 : 40$ )

約1.6mを測る。

北東側の土壙4は、上面最大径約100cm、床面最大径約120cm、くびれ部最大径約90cm、深さ約55cmの断面フラスコ状を呈する土壙である。遺物は、弥生土器片が小型のポリ袋1袋分、叩き石1点が出土している。

#### 土壙4出土土器（第22図5、6）

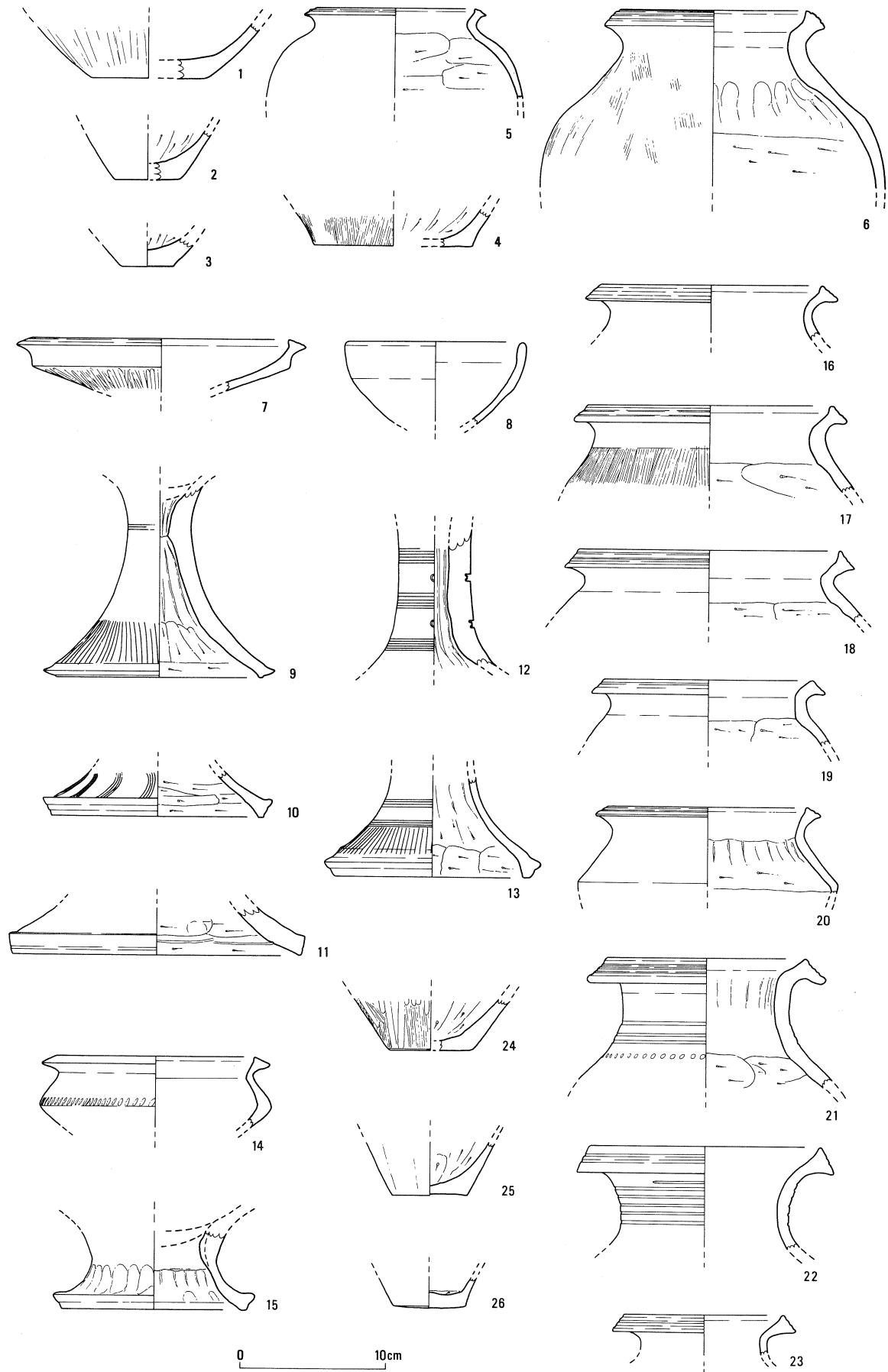
5・6は甕形土器である。いずれもやや緩やかに「L」字状に外反する口縁部をもち、端部は上下両方向にやや拡張する。内傾する端面には、5は2条の、6は3条の凹線文をめぐらせる。5は頸部から急に張り出す胴部をもつ器形である。内面は頸部以下を左向き横方向のヘラケズリで仕上げる。6は外面はハケ調整、胴部内面は左向き横方向のヘラケズリ、肩部内面には成形時の指頭圧痕を残す。

#### 土壙5（第21図）

土壙5は、上面最大径約150cm、床面最大径約160cm、くびれ部最大径約120cm、深さ約95cmを測り、土壙4同様に断面フラスコ状を呈する。遺物は、弥生土器片が小型のポリ袋3袋分出土した。

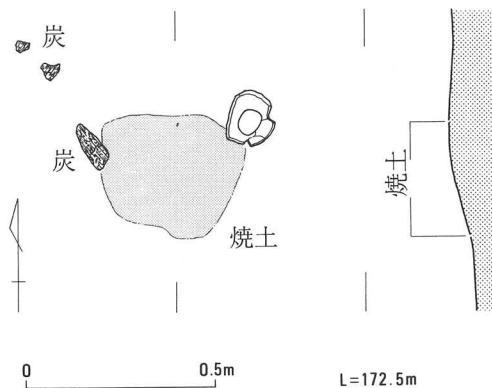
#### 土壙5出土土器（第22図7～26）

7・8は高杯形土器の杯部である。7の口縁部は「L」字状に外反し、端部は両側に拡張される。内傾する端面には凹線が施されるようである。底部外面は縦方向のヘラミガキにより仕上げている。8は、椀状の杯部から緩やかに屈曲して上方へ立ち上がる口縁部をもち、端部は丸くおさめる。9～13は高杯形土器の脚部である。下端部は、9・10・13はいずれも上方（外方）へやや肥厚、拡張し、11はわずかに上方へつまみ上げている。いずれも外傾する端面に1条または2条の凹線をめぐらせる。9・12・13には中部に3条～6条の沈線文がめぐらされる。9は遺存状態が悪く細かな観察が不可能であるが、沈線文は2段以上になる可能性がある。12は3段の多条の沈線文の間に円形刺突文が90°ごとに2段に施される。9・13は下部に沈線文を放射状に連続して施し、10は下部に湾曲した櫛描直線文を連続して施す。10～13は外面をナデによって仕上げる。内面は、9・13は下半部に下向き縦方向のヘラケズリを施し、9～11・13はいずれも下端部を左向き横方向のヘラケズリで仕上げる。14は台付鉢と考えられる。頸部から緩やかに「L」字状に外反する口縁部をもつ。端部は上下両方向に肥厚し、内傾する端面をもつ。胴部は最大径部がそろばん玉状に稜をもって張り出す器形である。胴部の稜の上側には斜方向の刻目文を連続して施す。15は台付鉢形土器の脚部である。端部は上下両方向にやや拡張し、外傾する端面は凹面となっている。内、外面とも絞り痕が認められる。内面には鉢部底面の円盤充填の痕跡が認められる。16～20は甕形土器である。いずれも頸部からやや緩やかに「L」字状に外反する口縁部をもつ。いずれも端部を下方または上下両方向にやや拡張し、内傾する端面には2条または3条の凹線をめぐらせる。20は肩部がそろばん玉状に稜をもって張り出す器形である。外面調整は、17は縦方向のハケ調整、18は観察できる範囲ではナデ仕上げである。内面はいずれも左向き横方向のヘラケズリを施す。20の頸部内面には絞り痕が残る。21～23は壺形土器である。21は垂直に立ち上がる頸部からやや緩やかに「L」字状に外反する口縁部をもつ。端部は上方にややつまみ上げ、下方は拡張して垂れ下がる。内傾する端面には4条の凹線文がめぐる。頸部下部には3条の沈線がめぐり、その下側に楕円形の刺突文が連続して施される。胴部外面、頸部内、外面はナデ仕上げ、胴部内面は右向き横方向のヘラケズリである。22



第22図 段状遺構2、土壙4、土壙5出土土器 (S = 1 : 4)

は弧状に外反する口縁部をもち、端部は上下にやや拡張する。内傾する端面には2条の凹線文がめぐる。頸部外面はナデ仕上げで、らせん状に沈線文がめぐらされる。23は頸部からやや緩やかに「L」字状に外反する口縁部をもつ。端部は上下にやや拡張し、内傾する端面には3条の凹線文をめぐらせる。24～26は壺形土器または甕形土器の底部である。24の外面は、下端まで施したハケ調整の上からヘラミガキを行う。25の外面はナデにより仕上げられる。内面は24・25とも上にケズリ上げる。26の内面底面は、右回りの輪状にヘラケズリが施される。



第23図 焼土遺構1平・断面図 (S = 1 : 20)

#### (4) 焼土遺構

##### 焼土遺構1 (第23図)

調査区中央部西寄りの丘陵南側斜面に位置する。約35cm×40cmの範囲で赤化した焼土面が認められ、その北西側から比較的大きな炭化材数点が検出された。遺物は、焼土面の北東側から甕形土器の口縁部破片が1個体分、口を下にした状態で出土した。

第24図 焼土遺構1出土土器 (S = 1 : 4)

##### 焼土遺構1出土土器 (第24図)

甕形土器である。頸部から緩やかに「L」字状に外反する口縁部をもつ。端部は上下両方向にやや拡張し、内傾する端面には2条の凹線文がめぐる。外面は縦方向のハケ調整、内面は右向き横方向のヘラケズリで仕上げる。

第24図 焼土遺構1出土土器 (S = 1 : 4)

#### (5) 土壙墓

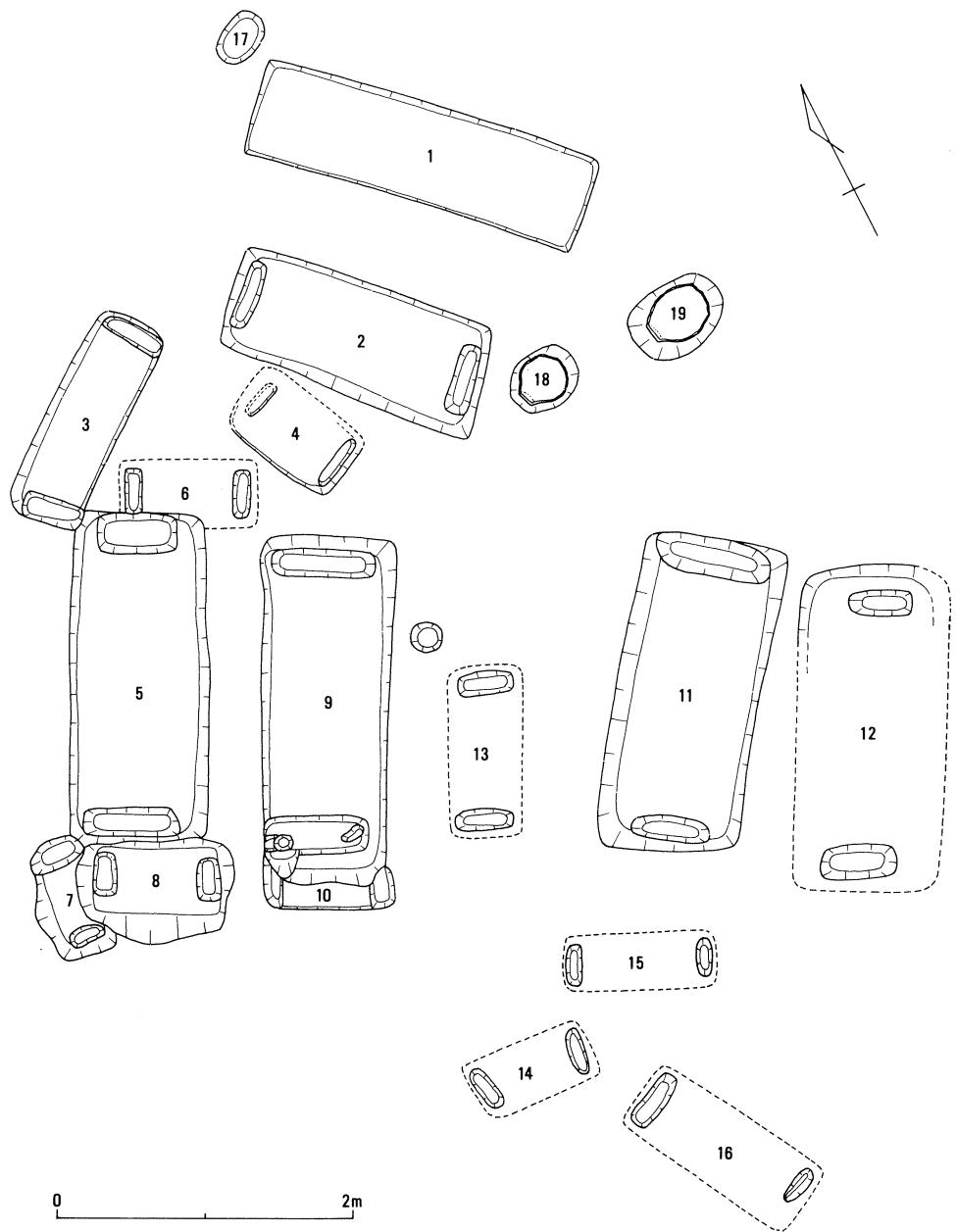
##### 土壙墓群 (第25図)

土壙墓群は調査区東端付近、南東にのびる丘陵の頂部に近い平坦面上に位置する。19基から成り、内16基が木棺墓、3基が土器棺墓である。ただし、土壙墓1からは小口溝が検出されていない。現状では盛土などは認められない。個々の土壙墓の数値の詳細については表1を参照されたい。木棺墓は、大型の2棺が並置されるものが3群みられ、それらの周囲に小型のものが作られている。特に土壙墓5・9の周囲には、小型のものが直交または平行する方向に配置される傾向が強い。大型並置の3群のうち、土壙墓1・2、土壙墓5・9はそれぞれ2棺が主軸方位を正確に合わせるが、土壙墓11・12はややずれる。3基の土器棺墓は土壙墓1・2の周囲に配され、土壙墓18、19の2基はいずれも土器棺の口縁を東北東に向いている。遺物は、土壙墓に伴うものとして、土器棺のほかにガラス玉1点が出土した。ガラス玉は排土中からの出土であり、いずれの土壙墓に伴うものかは明らかでない。ちなみに土壙墓の全ての排土を水洗したが、他に玉類は検出されなかった。そのほかに混入と考えられるものとして、黒曜石、サヌカイトのチップ数点、石鏃1点、弥生土器片が出土している。

##### 土器棺墓

##### 土壙墓17

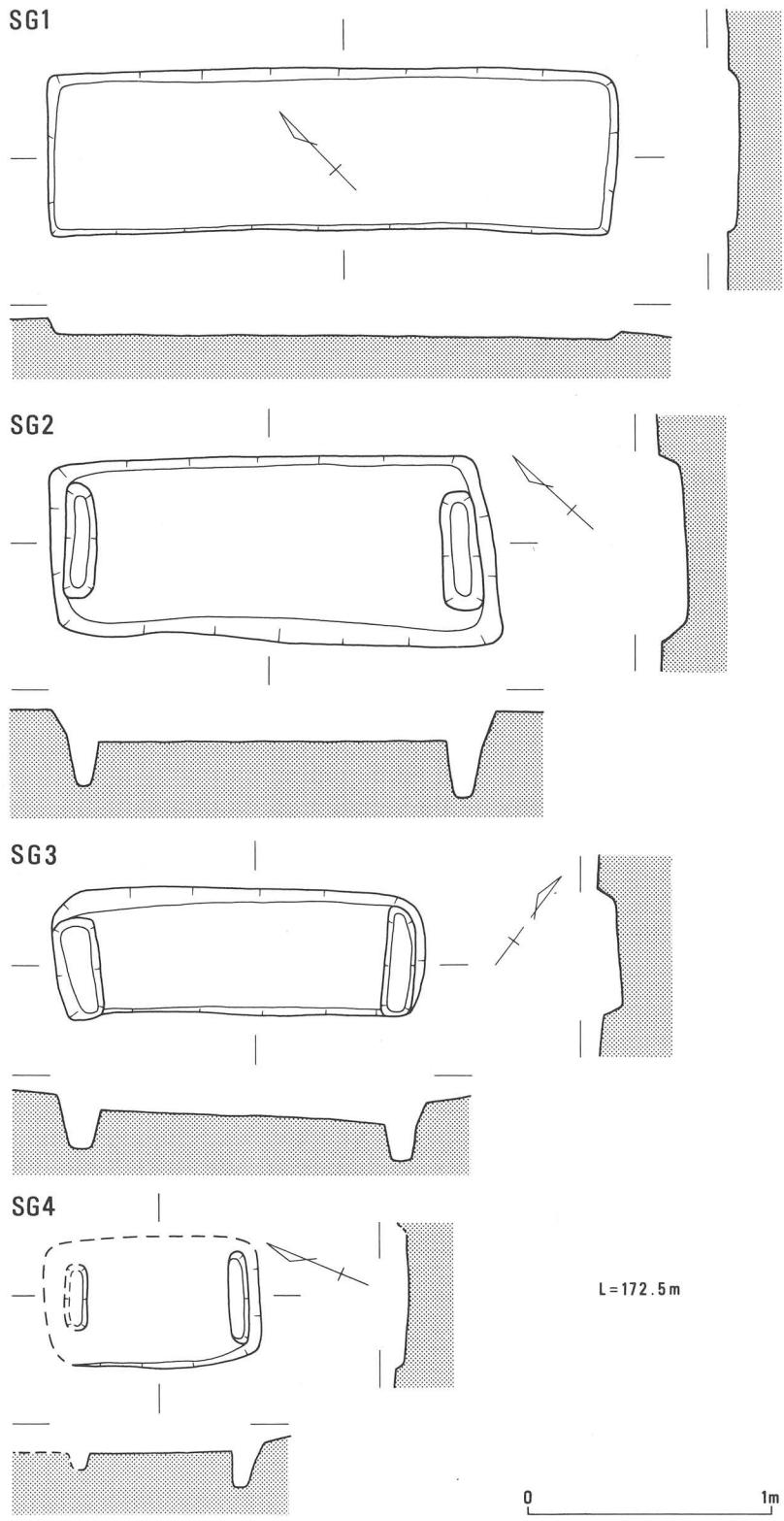
土壙墓1の側に近接して位置する。表土剥ぎ終了の時点では掘り形の最下部しか残存しておらず、全



第25図 土壙墓全体図 (S = 1 : 50)

土壙墓 SG	墓 壇 上 縁			墓 壇 底		小 口 溝			小 口 溝			小 口 間 距 離	主 軸 方 位		
	長さ	幅	深さ	長さ	幅	長さ	幅	深さ	長さ	幅	深さ				
1	234	68	7	228	60	-	-	-	-	-	-	-	北西-南東		
2	184	78	13	172	68	北西	48	14	21	南東	48	16	23	142	北西-南東
3	152	52	9	148	44	北東	44	13	15	南西	42	18	16	116	北東-南西
4	(90)	(55)	3	-	-	北々西	28	-	7	南々東	38	8	10	58	北々西-南々東
5	228	96	29	219	82	北々東	54	28	23	南々西	66	20	17	172	北々東-南々西
6	-	-	-	-	-	西北西	32	(12)	9	東南東	34	13	14	62	西北西-東南東
7	84	(45)	13	63	(30)	北	38	22	16	南	25	13	11	42	北-南
8	108	(75)	34	88	45	西北西	30	17	14	東南東	30	19	15	53	西北西-東南東
9	238	93	15	206	78	北々東	70	20	14	南々西	72	26	17	160	北々東-南々西
10	90	-	6	84	-	西北西	-	13	5	東南東	-	17	7	59	西北西-東南東
11	216	98	35	204	82	北東	82	26	9	南西	46	18	10	164	北東-南西
12	-	-	5	-	-	北々東	43	20	15	南々西	52	26	18	154	北々東-南々西
13	-	-	-	-	-	北々東	38	18	12	南々西	41	16	14	75	北々東-南々西
14	-	-	-	-	-	西	30	13	8	東	33	12	6	54	西-東
15	-	-	-	-	-	西北西	28	12	9	東南東	26	12	5	76	西北西-東南東
16	-	-	-	-	-	北西	42	16	10	南東	-	12	6	100	北西-南東

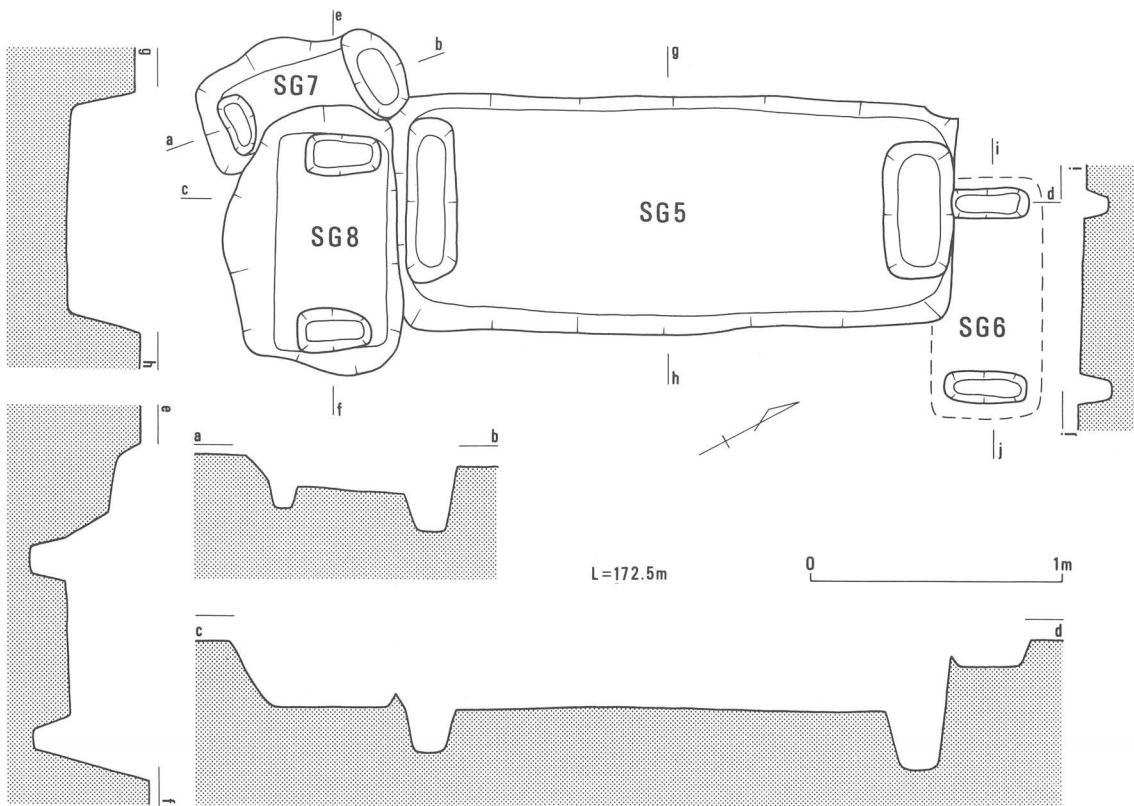
表1 木棺土壙墓一覧表 (( )内は復元値、他は全て検出時の値)



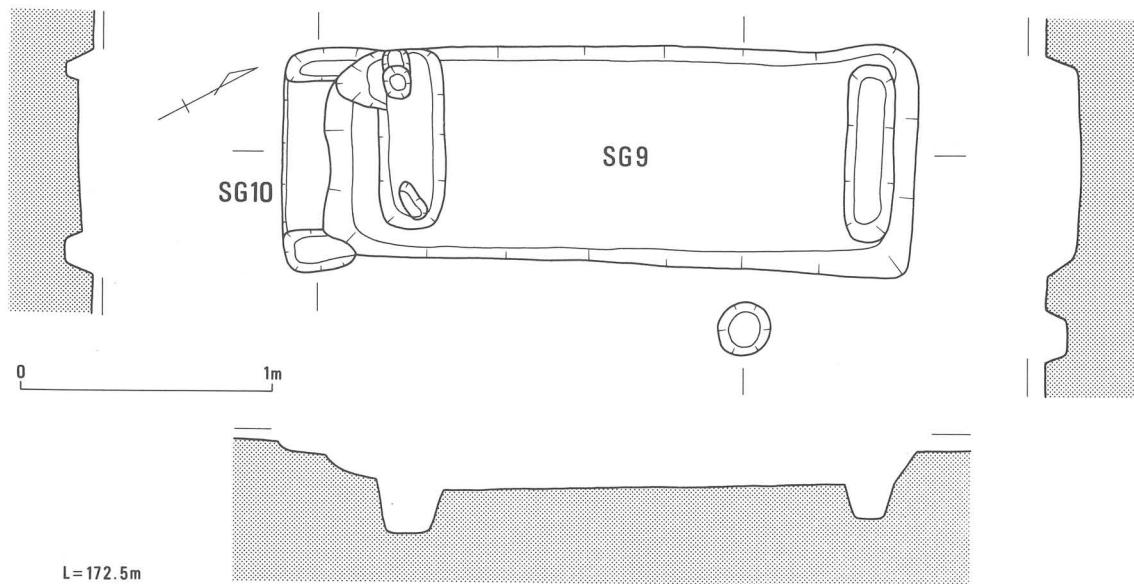
第26図 木棺土壙墓平・断面図 (1) (S = 1 : 30)

#### 土器棺墓出土土器 (第31図)

1は土壙墓17出土の甕形土器の下半部である。胴部外面にはほぼ全面にハケ調整を、内面では下部に縦方向のヘラケズリを施し、上半部は斜め左にケズリ上げる。2・3は土壙墓18出土である。2は壺形土器である。中程の張った球形の胴部をもつ器形である。遺存状態が悪いが、外面にはハケ調整が認め

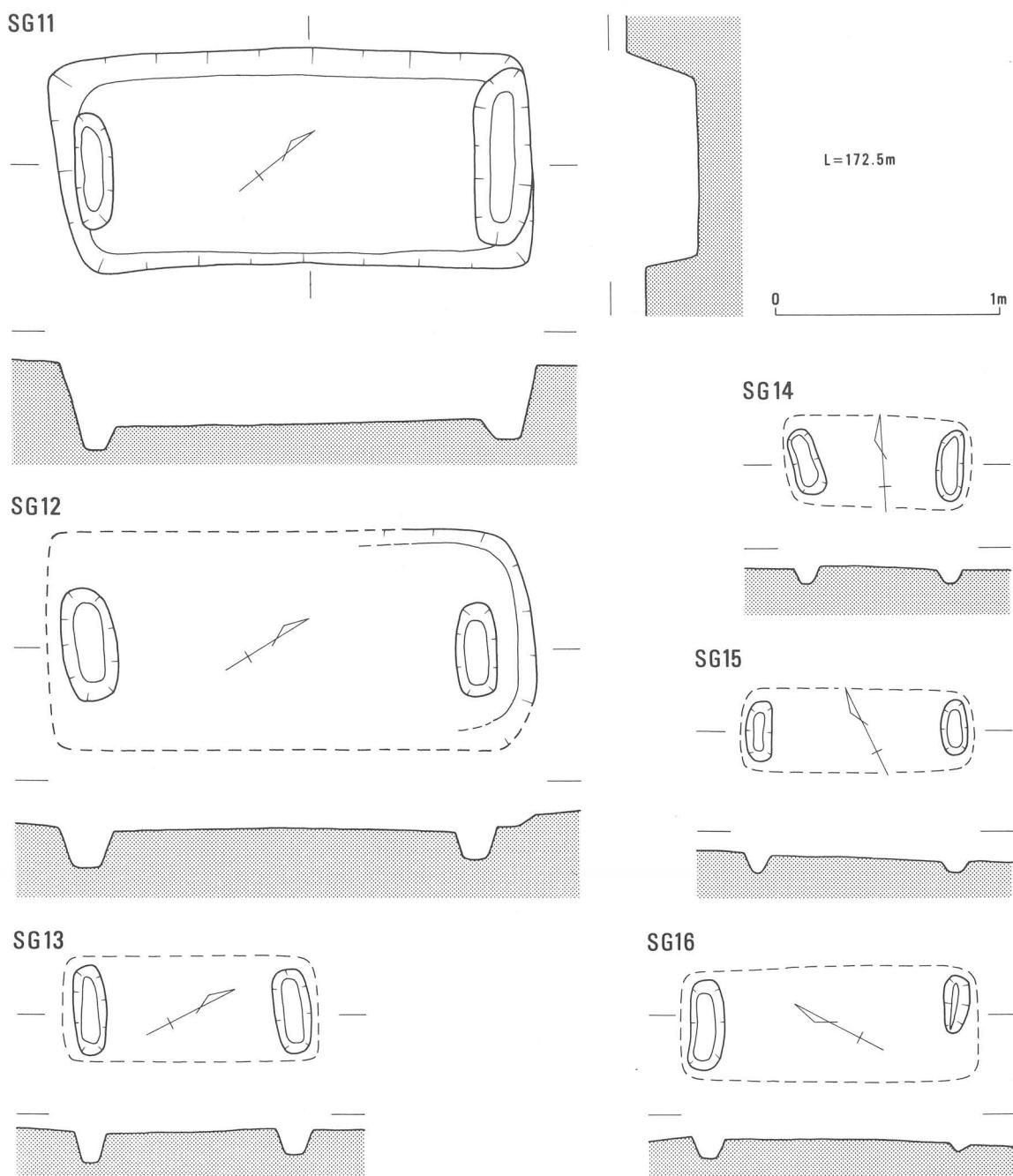


第27図 木棺土壙墓平・断面図（2）（S = 1 : 30）

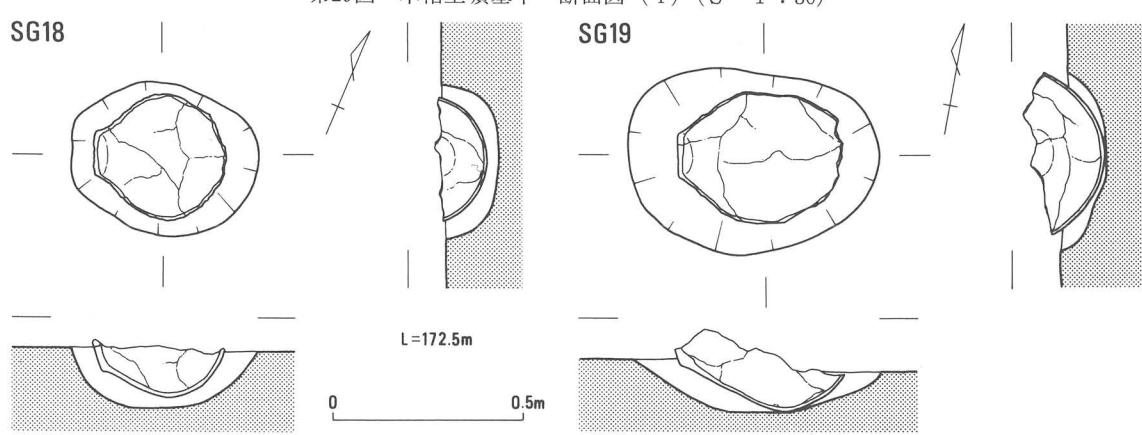


第28図 木棺土壙墓平・断面図（3）（S = 1 : 30）

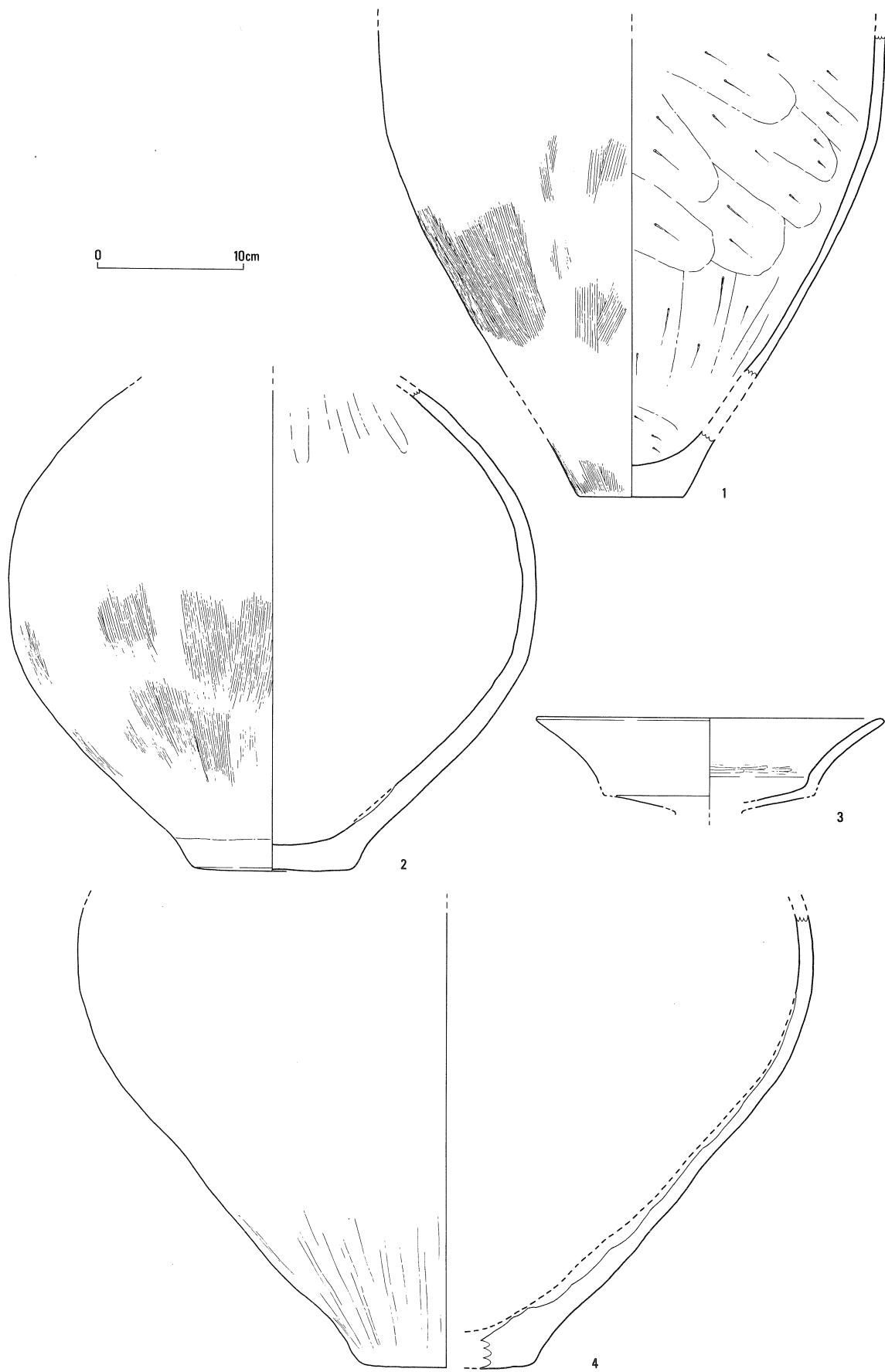
られる。3は高杯形土器である。口縁部は「L」字状に外反し、端部は丸くおさめる。内面の一部に横方向のヘラミガキが認められる。4は土壙墓19出土の壺形土器の胴部下半である。遺存状態が悪く、内、外面の調整は明らかでない。



第29図 木棺土壙墓平・断面図 (4) ( $S = 1 : 30$ )



第30図 土器棺墓平・断面図 ( $S = 1 : 20$ )



第31図 土器棺墓出土土器 ( $S = 1 : 4$ )

#### (6) 出土石器 (第32図)

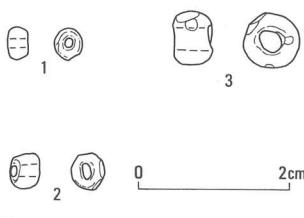
1・2は叩き石である。1は土壙4、2は段状遺構1の出土である。1は玢岩の棒状礫を切断し、平坦面を作り出したものである。平坦面には中央部に凹みがあり、逆側の端部には敲打痕が認められる。両端部には剥離が認められる。2は棒状礫を切断し、一端に一面の平坦面を、他端に2面の平坦面を作り出している。表面は磨かれ、下側平坦面側には剥離が認められる。上下3面の平坦面には、いずれも多数の凹みが認められる。津山市大田十二社遺跡4号住居址（註1）、同西吉田遺跡（註2）に出土例がある「スタンプ状石器」と呼称されているものに類するものと思われる。石材は不明である。3は住居址2出土のハンマーストーンである。玢岩の断面半月状の棒状礫を利用したもので、上下両端部に剥離がみられる。図の上側の端部には敲打痕が認められる。4は用途不明の球状の石製品である。住居址2の東側に近い位置で採集された。安山岩製であるが、自然礫の可能性も考えられる。5は住居址2出土の磨製石斧である。石材は不明である。頭部と刃部の片側を折損しているが、刃部折損面先端部に研磨が施されており（図のスクリーントーン部分）、折損後に再利用していることがうかがえる。折損後に刃部側面に頭部側からの打撃による剥離が多数認められることから、クサビ状の石器として頭部側折損面をたたいて使用された可能性も考えられる。頭部側、側面の折損面は1枚の剥離面からなる。6・7は磨製石包丁である。6は段状遺構1からの出土である。表裏には研磨痕が多数認められる。2カ所に紐孔をもつ。穿孔は2ヶ所とも表裏両面から行われている。紐孔の周囲には紐の着装痕が表裏に認められる。表側では2カ所の紐孔からそれぞれ背部側へ伸びる痕跡がみられ、裏側では2カ所の紐孔を結ぶように痕跡が認められる。最大厚は8mmを測る。粘板岩製であるが、全体が灰褐色を呈しており、熱を受けたことによって変色したと考えられる。7は大きく欠損する。表裏とも剥離し、背部と紐孔の一部をわずかに残す。白雲母石英片岩製である。8はサヌカイトの剥片である。住居址2南側の堆積土中からの出土である。付近からは他にもサヌカイト製小剥片が若干量検出されている。伴出遺物はなく、所属時期は明らかでない。9～12は石鏸である。9は土壙墓群東側、10は住居址4東側付近での採集品である。11は住居址4からの出土、12は土壙墓埋土中からの出土である。いずれもサヌカイト製である。9・10・12は凹基式石鏸に分類される。形態の上からも、また風化が激しいことからも、縄文時代のものと考えられる。11は住居址4に伴うものと考えられる。表裏とも「石の目」の関係上、片側からは低い角度で広く長い剥離を、もう片側からは急角度の階段状の剥離を施している。

（註1） 河本 清、中山俊紀、安川豊史、行田裕美『大田十二社遺跡』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集』津山市教育委員会 1981

（註2） 行田裕美『西吉田遺跡』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集』津山市教育委員会 1985



第32図 出土石器 (1～8 S=1:2、9～12 S=2:3)



第33図 出土玉類 (S = 1 : 1)

#### (7) 出土玉類 (第33図)

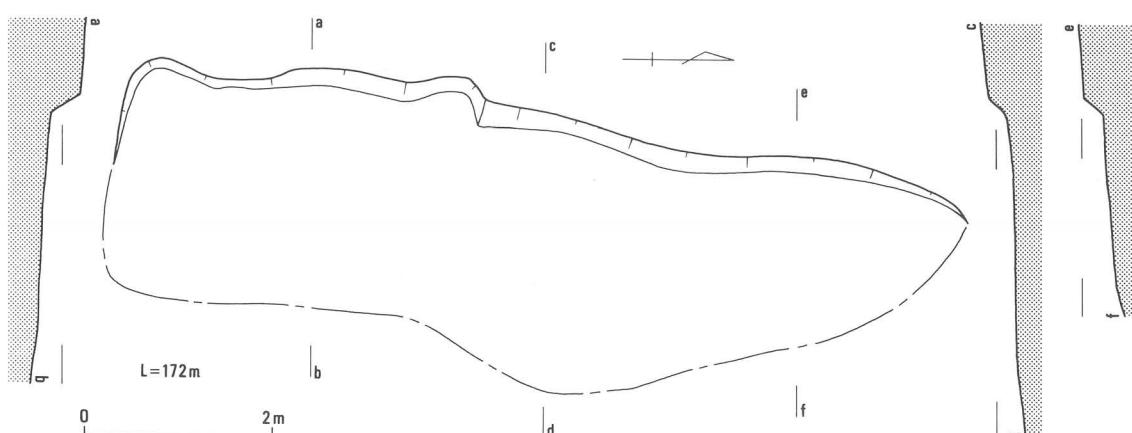
1・2は住居址1床面から出土したガラス小玉である。1は青緑色で、側面を気泡により大きく穿たれている。2は緑青色を呈する。3は土壌墓埋土から出土したガラス小玉である。青色を呈する。これらは3点とも表面に平坦な部分が何カ所か認められるが、研磨によるものかどうかは判然としない。いずれも内部の気泡に方向性を認めることはできなかった。

## 2 その他の遺構と遺物

弥生時代以外の時期、または時期不明の遺構としては、段状遺構1基、縄文時代のものとみられる陥とし穴2基、奈良時代の土壙1基がある。

#### 段状遺構4 (第34図)

調査区中央部付近、鞍部からやや西へ上がった緩やかな尾根上北寄りに位置する。斜面を削平し、長さ約9.2m、幅2.2m～2.7m程の平坦面を形成している。土器の小片2点が出土したが、図示できるものはない。



第34図 段状遺構4 平・断面図 (S = 1 : 80)

#### 土壙6 (第35図)

調査区西側の丘陵北東側斜面に、段状遺構1と重複して位置する。遺構確認面で長径約150cm、短径約110cm、深さが最大で65cmを測る。底面中央部には上面径19cm、深さ14cmの小ピットが配される。

#### 土壙7 (第36図)

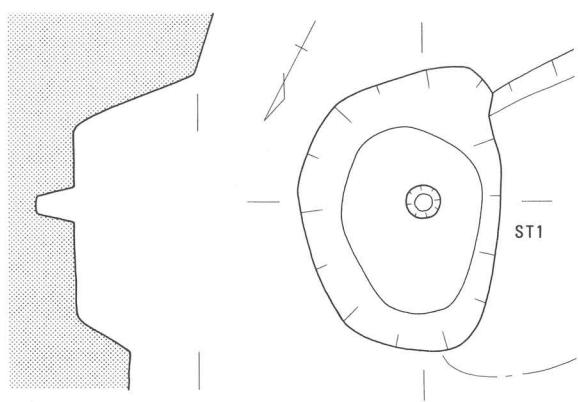
調査区東部の鞍部からやや東へ上がった尾根上に位置する。遺構確認面で長径約100cm、短径約80cm、深さが最大で100cmを測る。底面中央部には上面径18×22cm、深さ18cmの小ピットが配される。このような底面に小ピットを配した土壙は「陥とし穴」と考えられている。土壙7、土壙8とも出土遺物は認められないが、縄文時代に属するものと推定される。

### 土壌 8 (第36図)

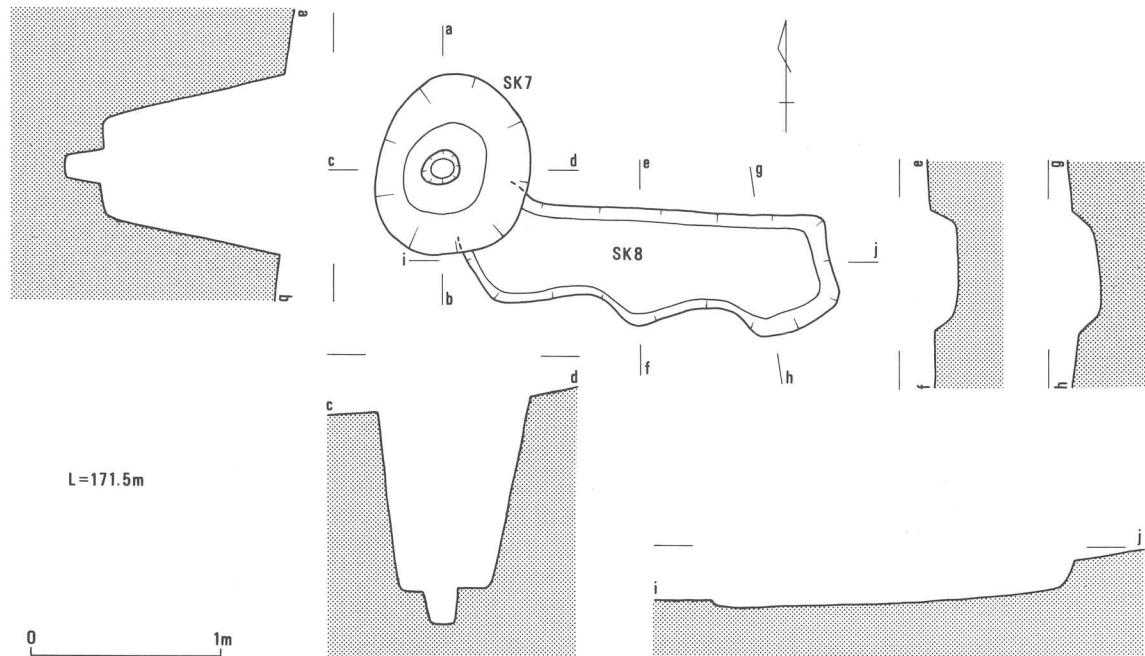
調査区東部の尾根上に、土壌 7 と重複して位置する。遺構確認面での長さ約200cm、幅50～65cm、深さが最大で15cmを測る不整形の土壌である。土壌内には多量の炭化物の堆積が認められた。遺物は、須恵器杯身、坏蓋破片各1点が出土した。

### 土壌 8 出土土器 (第37図)

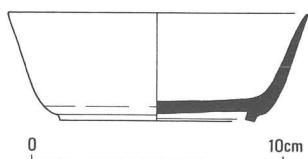
須恵器杯身である。貼り付け高台がつく。体部は底部との屈曲部から直線的に斜方向に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。底部にはロクロ回転方向が時計回りの回転ヘラケズリが施される。体部外面、内面、高台はナデにより仕上げる。



第35図 土壌 6 平・断面図 ( $S = 1 : 40$ )



第36図 土壌 7、土壌 8 平・断面図 ( $S = 1 : 40$ )



第37図 土壌 8 出土土器

( $S = 1 : 3$ )

## IV まとめ

### 1 弥生土器の時期について

野村高尾遺跡の出土の弥生土器は、大きく中期中葉、後期前半、後期後半の3時期に分けることができる。

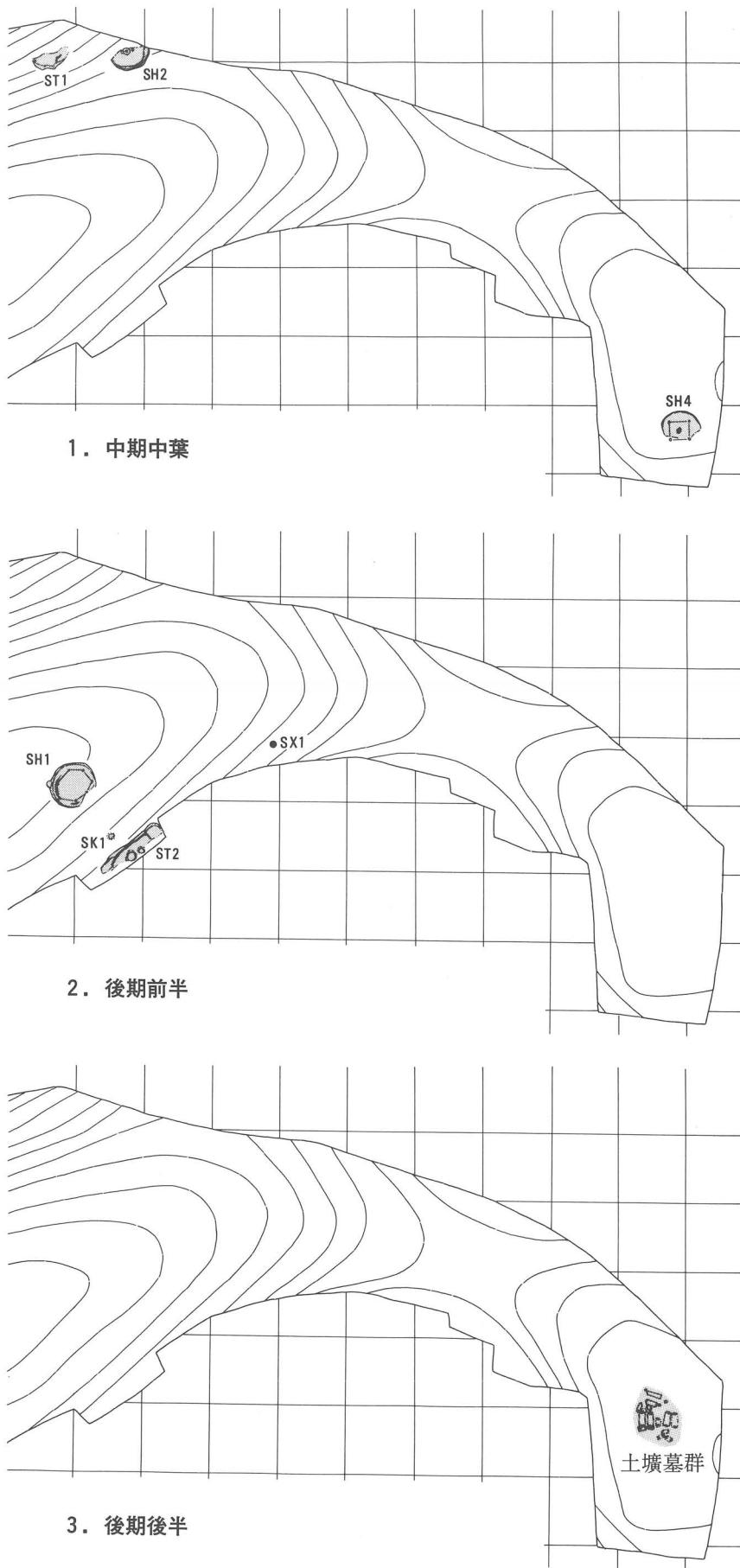
中期に属するものとしては、段状遺構1から一括性の高い土器群が検出されている。これらは床面に放棄された状況でまとまって検出されており、同時期に使用されていた可能性の高いものである。高杯形土器、甕形土器、壺形土器の3器種が認められる。このうち高杯形土器、甕形土器には、いずれも凹線文をもつものはみられない。甕形土器の口縁端部は、わずかに上方につまみ上げるものが多いが、肥厚、拡張はほとんど行われない。壺形土器も、1点を除き全て凹線文をもたないものである。第13図22は、凹線文をもたない肥厚させた口縁端部に斜方向の刻目文を施し、胴部に連続する刺突文をめぐらせるものであるが、これは英田郡作東町高本遺跡（註1）の「高本I式」期に類例が求められる。第13図18は、口縁端部を肥厚せず、頸部には幅の広い凹線を施し、凹線文間に稜を形成するものである。これは津山市西吉田遺跡（註2）住居址4出土の土器に類例がみられ、「西吉田I式」期に含まれるものとして捉えられる。西吉田I式に先行するとされる高本I式では、頸部に同様の凹線文をもつ壺形土器が存在する一方、凹線文を用いず、稜が断面三角形の貼り付け凸帯によって形成されるものを残している。西吉田I式は凹線文の使用が開始された段階であり、本遺構の土器群よりも明らかに時期が下るものである。これらのことから本遺構の土器群を従来の編年と対照すると、高本I式併行期またはそれ以降で、西吉田I式に先行する時期、すなわち中期中葉を3時期に細分した場合の中段階に位置付けられる。住居址2、住居址4出土の土器もこの時期のものであろう。西吉田遺跡報告書の編年表に当てはめると表2のようになる。

前葉		
	古	
中期	中葉	高本I式、野村高尾段状遺構1
	新	西吉田I式、高本II式
	後葉	金井別所 西吉田II式
後期	古	
	新	ビシャコ谷 西吉田III式、押入西

表2 弥生中期土器編年表

後期前半に属するものでは、段状遺構2の土壙4、土壙5からまとまって出土した土器群がある。これらは土壙内の埋土上部から底面にいたる部分から検出されており、土壙が埋没していく過程で廃棄された出土状況を示す。そのため、本遺構出土の土器群には若干の時期幅を考えなければならない。第22図7の高杯形土器は、山陽地方における高橋護氏の土器編年（註3）のVIIb期、津山市内では大田十二社遺跡（註4）1式期に含まれると考えられる。また、脚部は高橋編年のVII期の中で捉えられる。いずれも後期前葉～前半に位置付けられる。甕形土器、壺形土器の口縁部端面にめぐらされる凹線文は、しっかりしたものと退化が進んでいるものが混在し、ある程度の時期幅をもつことが考えられる。しかし、後期後半のものにみられるような口縁端部の上方への拡張につながる傾向はほとんど認められず、全体として後期前半の範囲に収まるものであろう。住居址1、土壙1、焼土遺構1の各遺構から出土した土器もこの時期のものとして捉えられる。

後期後半に属するものは、土壙墓出土土器である。第31図3の高杯形土器は、口縁端部を丸くおさめ、杯部は稜をもって屈曲し、大きく外反する器形である。杯部の深さはさほど深くならず、口縁部の立ち上がりも急ではない。甕形土器、壺形土器は、胴部下半がやや内湾しながら底面につながるものである。こうした特徴から、後期後半の中でも高橋編年山間部Ⅷ期、岡山県南部地方と対照すれば百間川後期Ⅱ～同Ⅲ期（註5）に併行する時期の中で捉えておきたい。



第38図 弥生時代時期別遺構配置図

## 2 弥生時代の遺構について

ここでは弥生時代の各遺構の時期と分布を示し、土壙墓群についてはその配置について若干触れてまとめたい。なお、住居址3は弥生時代のものと考えられるが、明確な時期は明らかでない。

中期中葉の遺構は発掘区の広い範囲にわたって散在する傾向を示す（第38図1）。住居址2、住居址4、段状遺構1がこの時期に属する。段状遺構3も中期の範疇で捉えられるが、その内でどこに位置付けられるかは明らかでない。

後期前半に属する遺構は発掘区の南西部に集中して分布する（第38図2）。住居址1、段状遺構2、土壙1、土壙4、土壙5、焼土遺構1がこの時期に含まれる。また、土壙2、土壙3は明確に時期を決定できる遺物は出土していないが、周辺遺構との位置関係からこの時期に含まれる可能性も考えられる。後期後半に属する遺構は土壙墓群である（第38図3）。この時期の美作地方の墓制については津山市竹ノ下遺跡、才ノ峪遺跡などの調査例からモデル化を行った論考がある（註6）。それによれば、大型の複数の棺が並置される中心埋葬の周囲を、直交または平行する方向に他の棺を取り囲み、さらに外方に方位の定まらないものが配されるというパターンを基本的なものとする。そしてそれが変異した形態として、中心埋葬が墓群の中で卓越し、独立して存在するもの、また中心埋葬が直交2棺のものなどがあり、この基本的モデルとその変異形態がこの時期の一般的なありかたであると想定している。そして複数棺並置のものには血縁関係を前提とした兄弟（姉妹）の埋葬を、2棺直交のものには夫婦とその近親者の埋葬を可能性として示している。

本遺跡の土壙墓群の中では、大型のものは2棺並置の配置をとる傾向が強い。その内で土壙墓5・9とその周囲の一群は、まさに基本モデルのありかたを示しているといえよう。つまり土壙墓5・9を中心とし土壙墓6・8・10・13が直交または平行する方向にそれを取り囲み、その外方に主軸方位を合わせないものが存在する。次に、この一群の中心埋葬と他の大型2棺並置のものとの関わりであるが、土壙墓1・2については、2棺が土壙墓5・9とは異なる方向に主軸方位を正確に合わせること、その周囲に土器棺が特徴的に配されることから、さきの一群とは異なる一定の関係をもつ一群である可能性が考えられる。土壙墓11・12は2棺が主軸方位を正確に合わせず、周辺部にも正確に直交または平行して配されるものをもたない。こうしたことから、さきの論考の仮説に当てはめれば、中心埋葬（土壙墓5・9または土壙墓1・2）を取り囲む一群、あるいは最も外方の一群として捉えられるものであろうか。このように、これらの土壙墓群は複数の群からなる可能性が考えられ、それらは時期を異にして形成された可能性も考えられる。しかしそれらは同じ地点に密集すること、各土壙墓の木棺部分が重ならない配置となっていることから、さほど大きな時期差はないものと考えたい。

(註1) 井上 弘、松本和男、泉本知秀、岡田 博、山磨康平「高本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告8』 岡山県教育委員会 1975

(註2) 行田裕美『西吉田遺跡』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集』津山市教育委員会 1985

(註3) 高橋 譲「山陽」 佐原 真編『弥生土器I』 ニューサイエンス社 1983

(註4) 河本 清、中山俊紀、安川豊史、行田裕美『大田十二社遺跡』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集』 津山市教育委員会 1981

(註5) 伊藤 晃、柳瀬昭彦、中野雅美 他「百間川原尾島遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告

39』岡山県教育委員会 1985

(註 6 ) 中山俊紀、湊 哲夫『才ノ峪遺跡』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第18集』 津山市教育  
委員会 1985





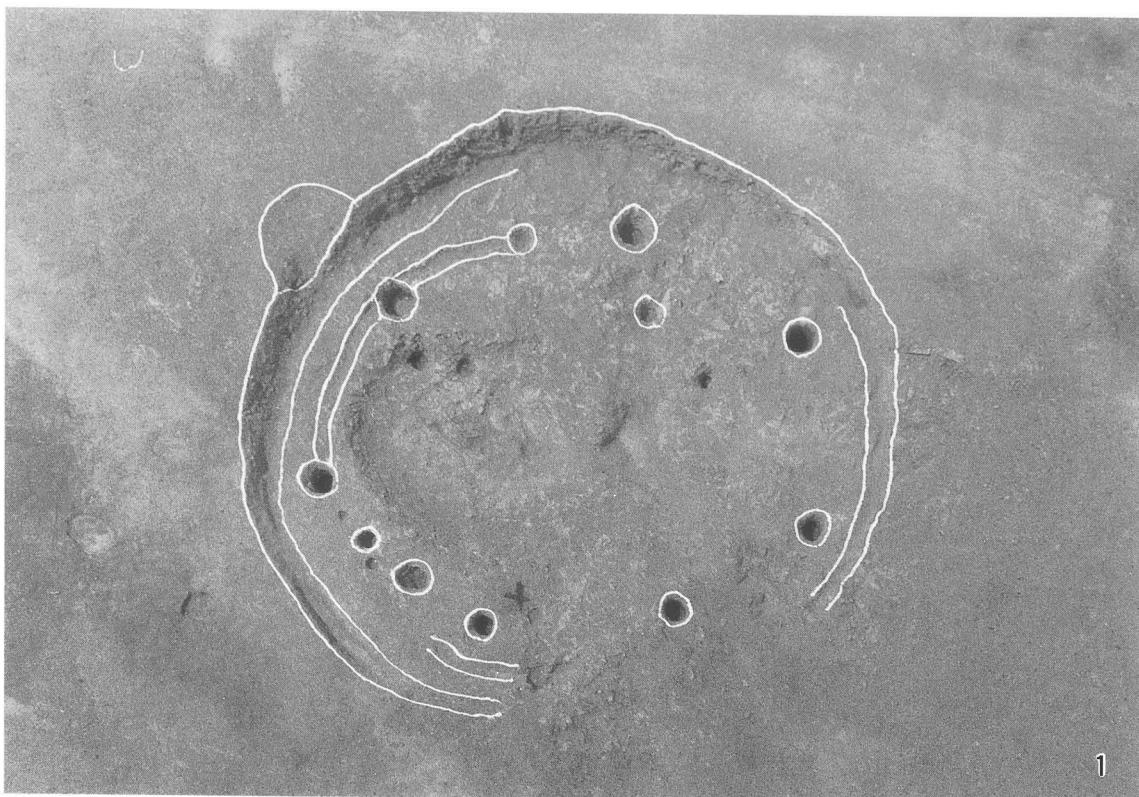
# 図版



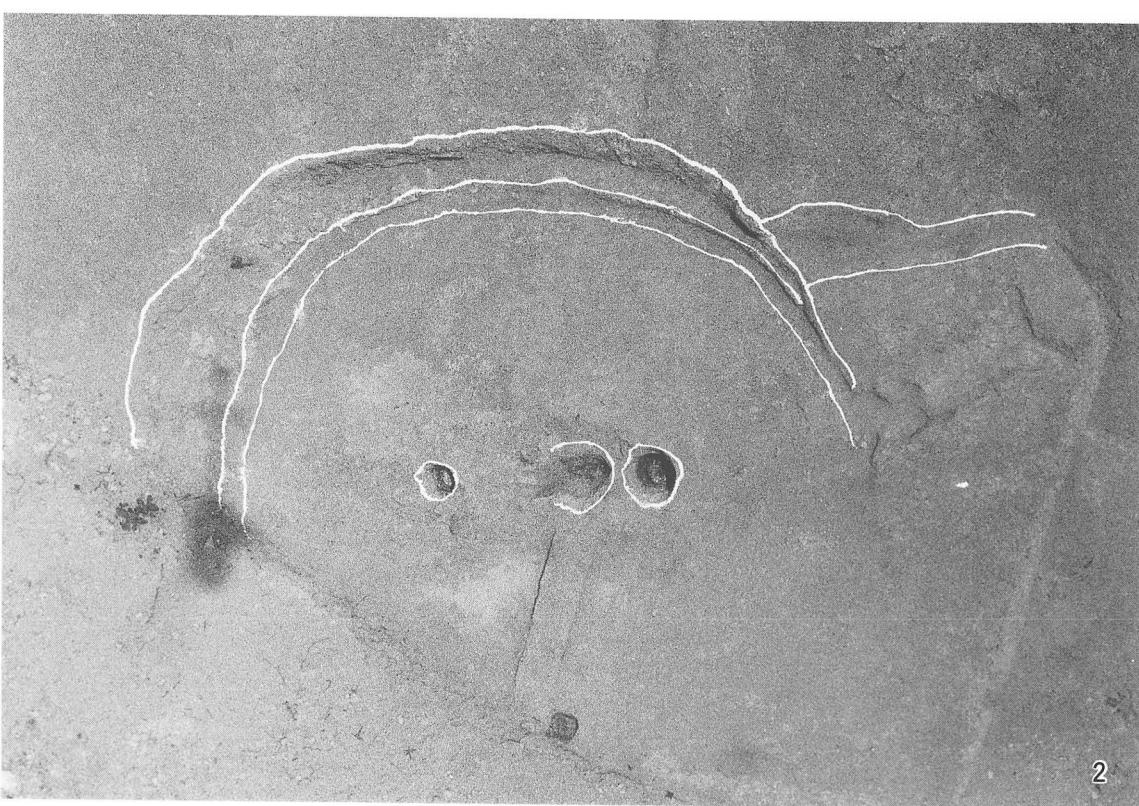
北側上空から野村高尾遺跡、高野本郷平野部を望む



図版 1

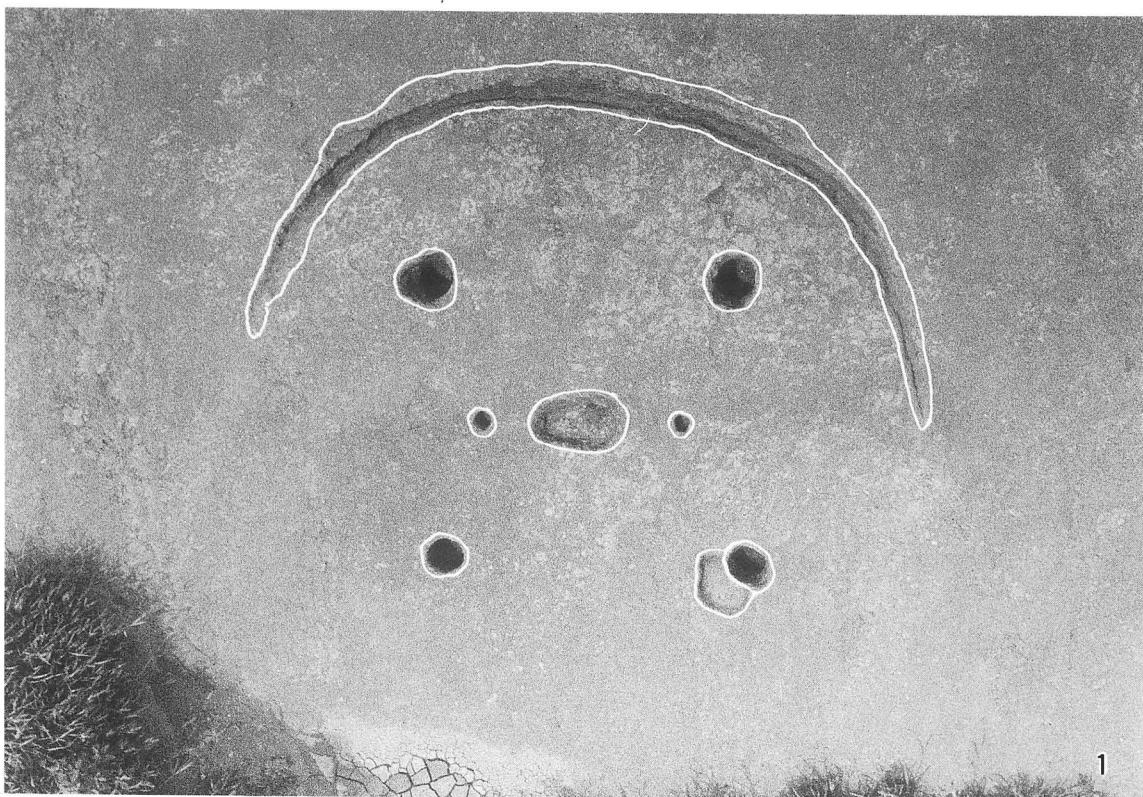


住居址 1

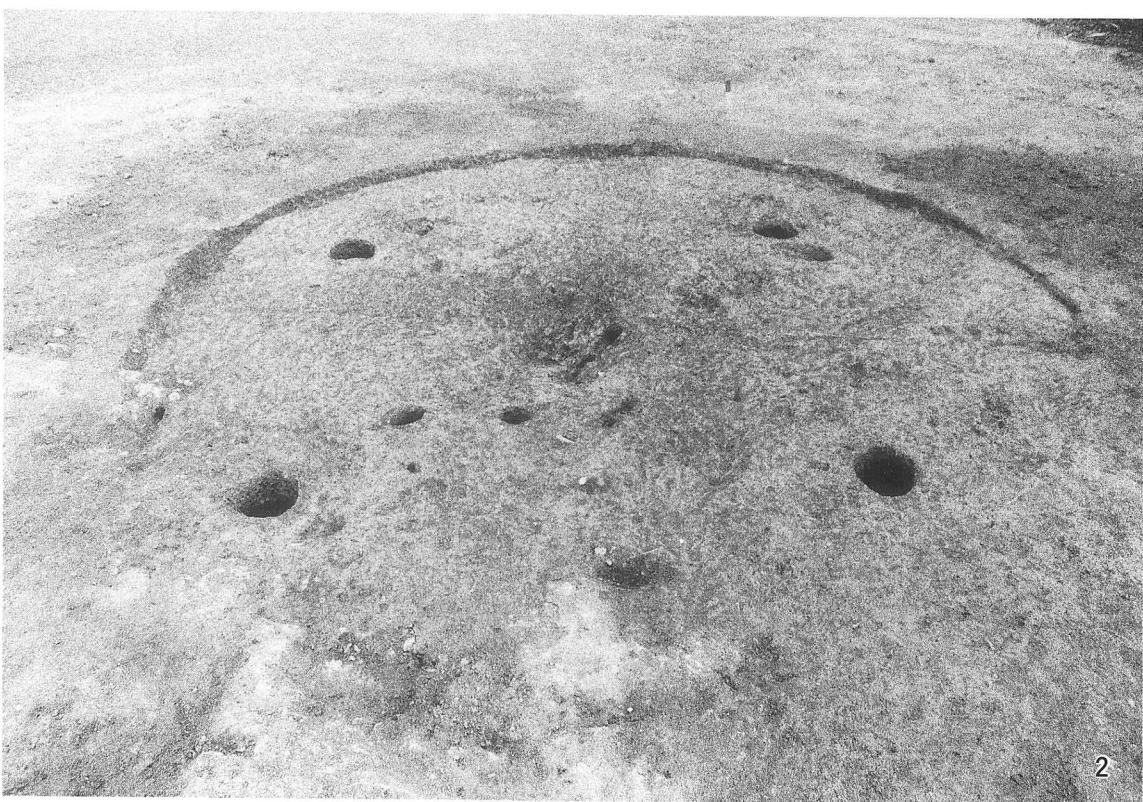


住居址 2

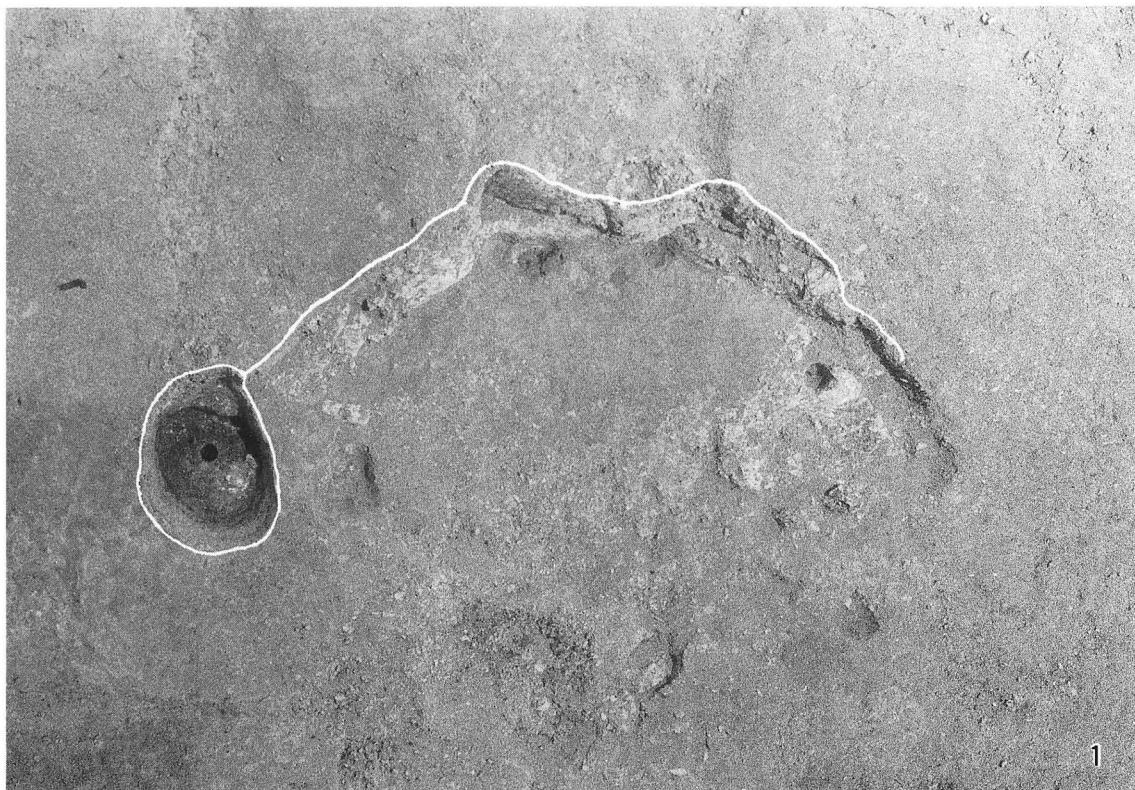
図版 2



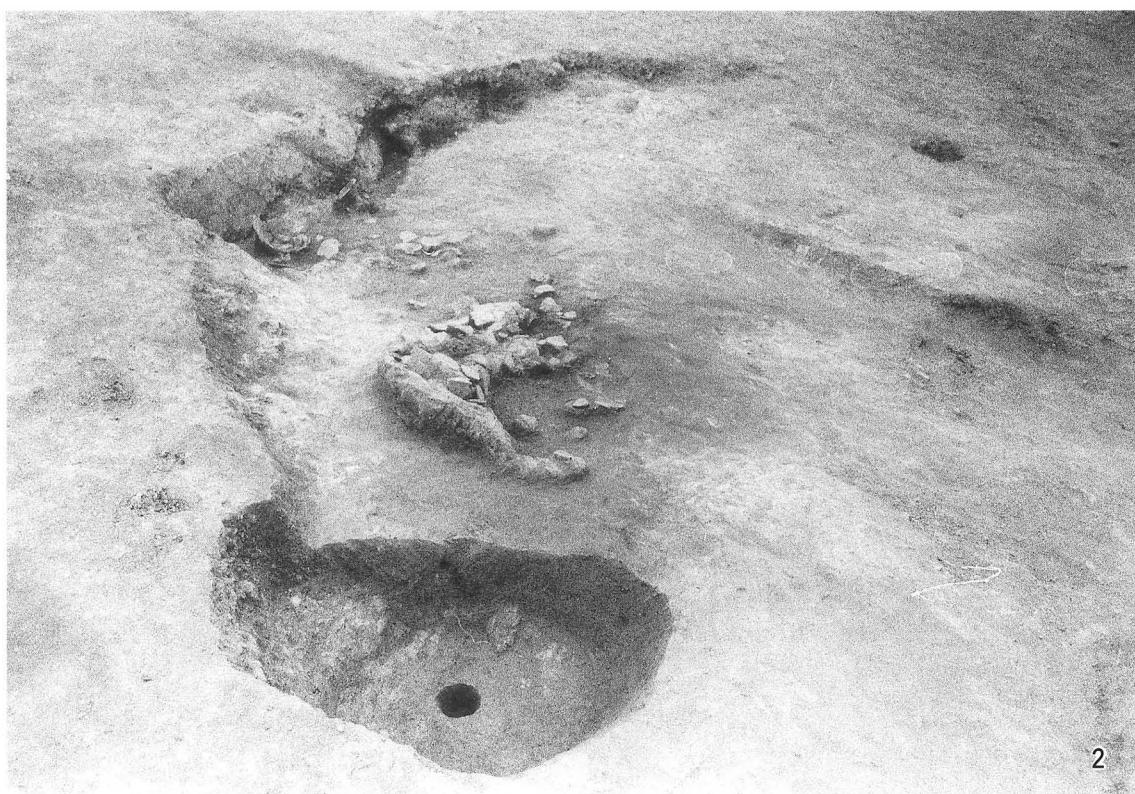
住居址 3



住居址 4 (南から)



段状遺構 1



段状遺構 1 一括遺物出土状況（東から）

図版 4

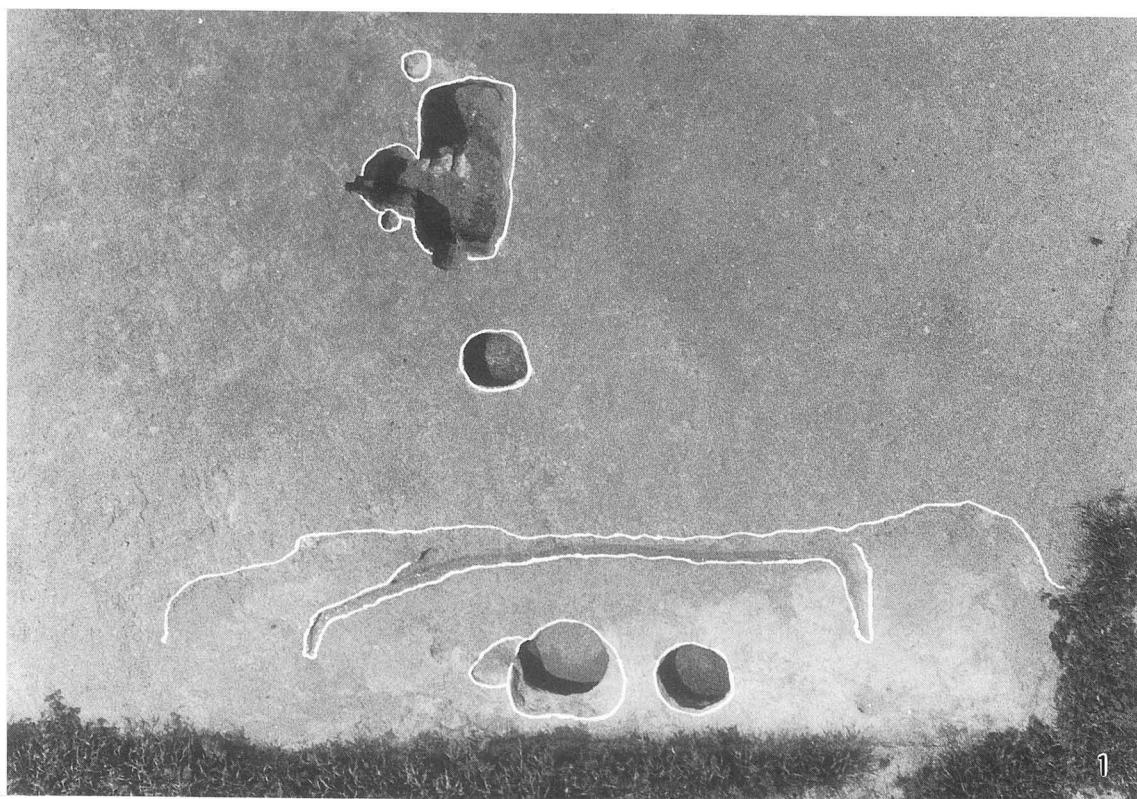


段状遺構 1 一括遺物出土状況（平坦面東部・北から）



段状遺構 1 一括遺物出土状況（南壁沿い・東から）

図版 5



段状遺構 2、土壤 1 ~ 5



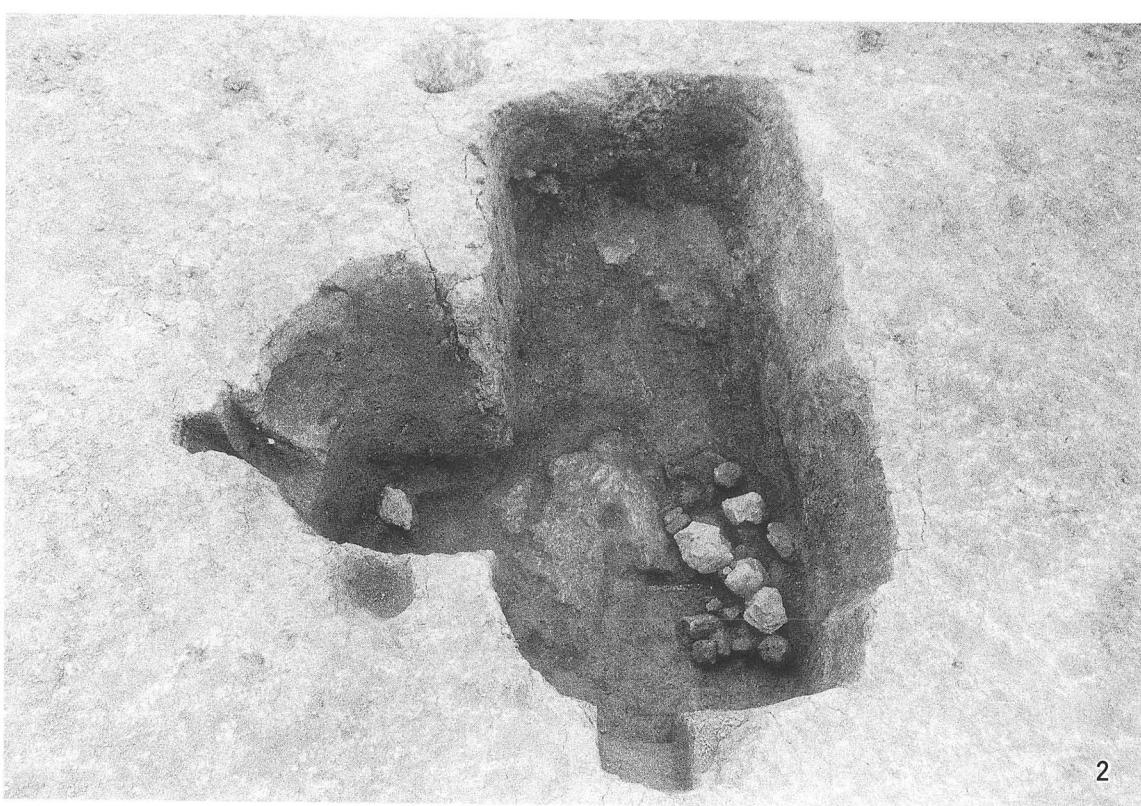
土壤 4・5 (南東から)

図版 6



1

土壤 1 (南西から)

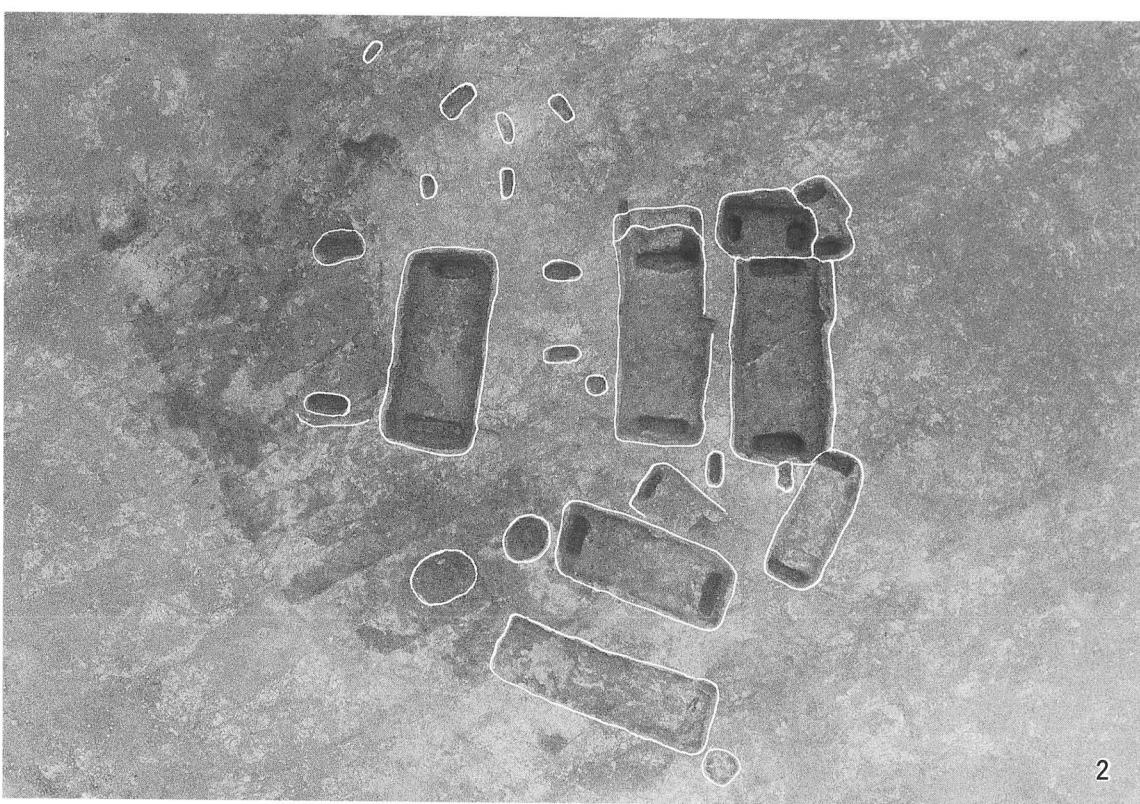


2

土壤 2・3 (南から)

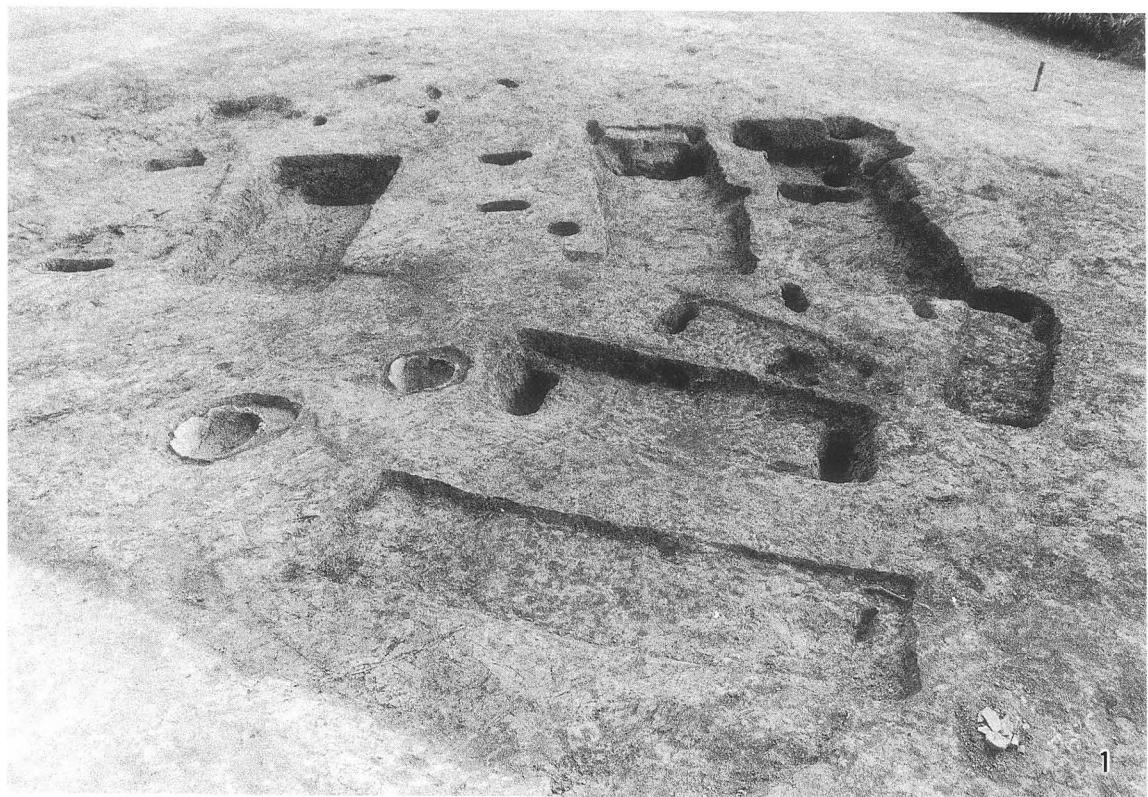


土壤 2 内白色粘土断面（西から）

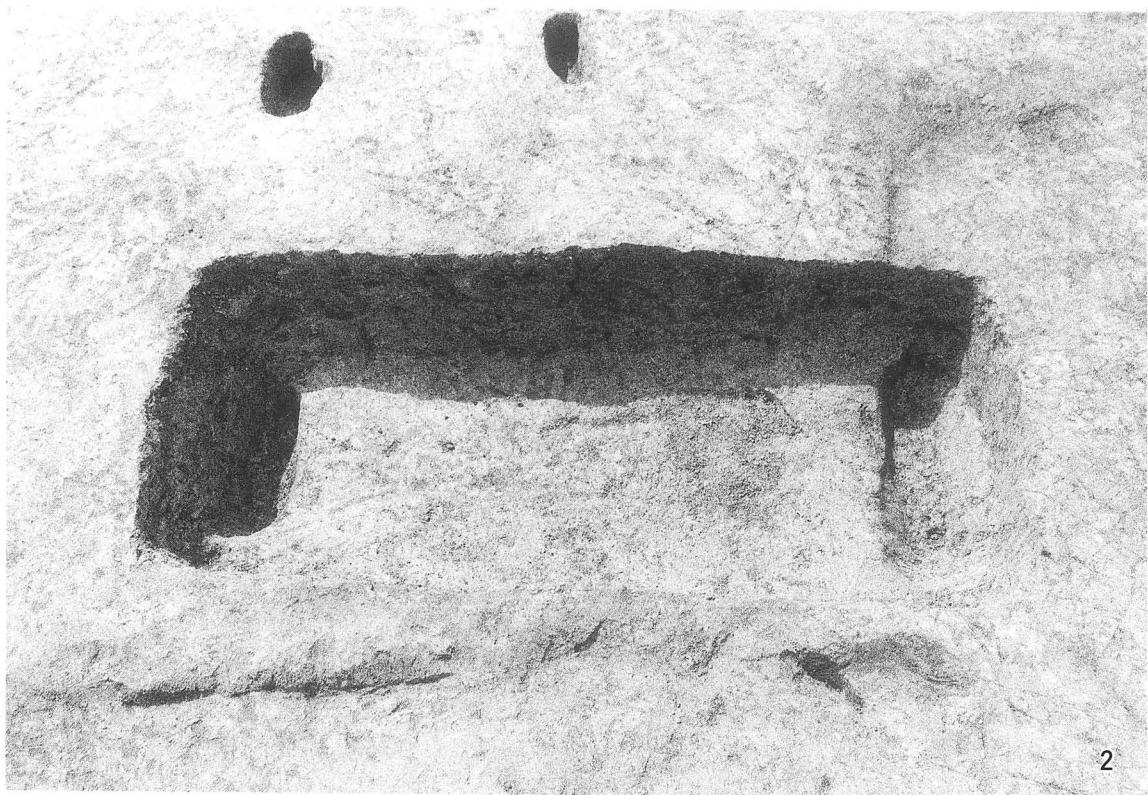


土壤墓群全景

図版 8

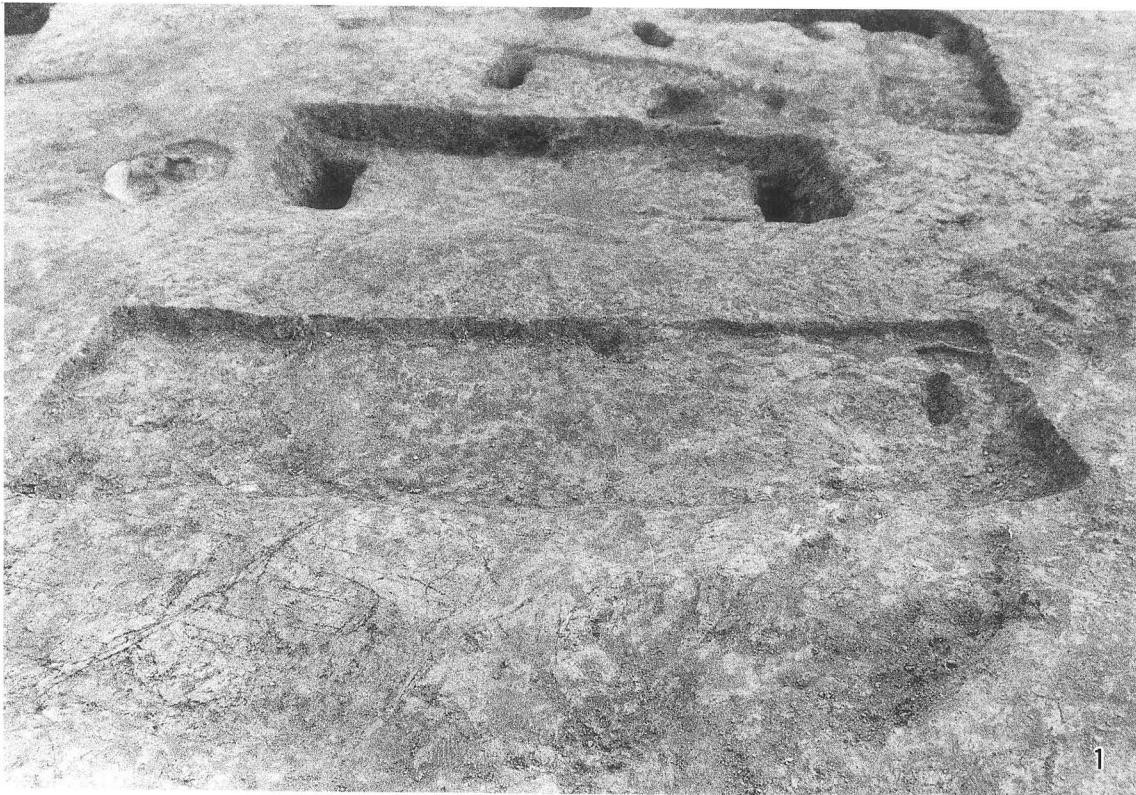


土壙墓群全景（北東から）

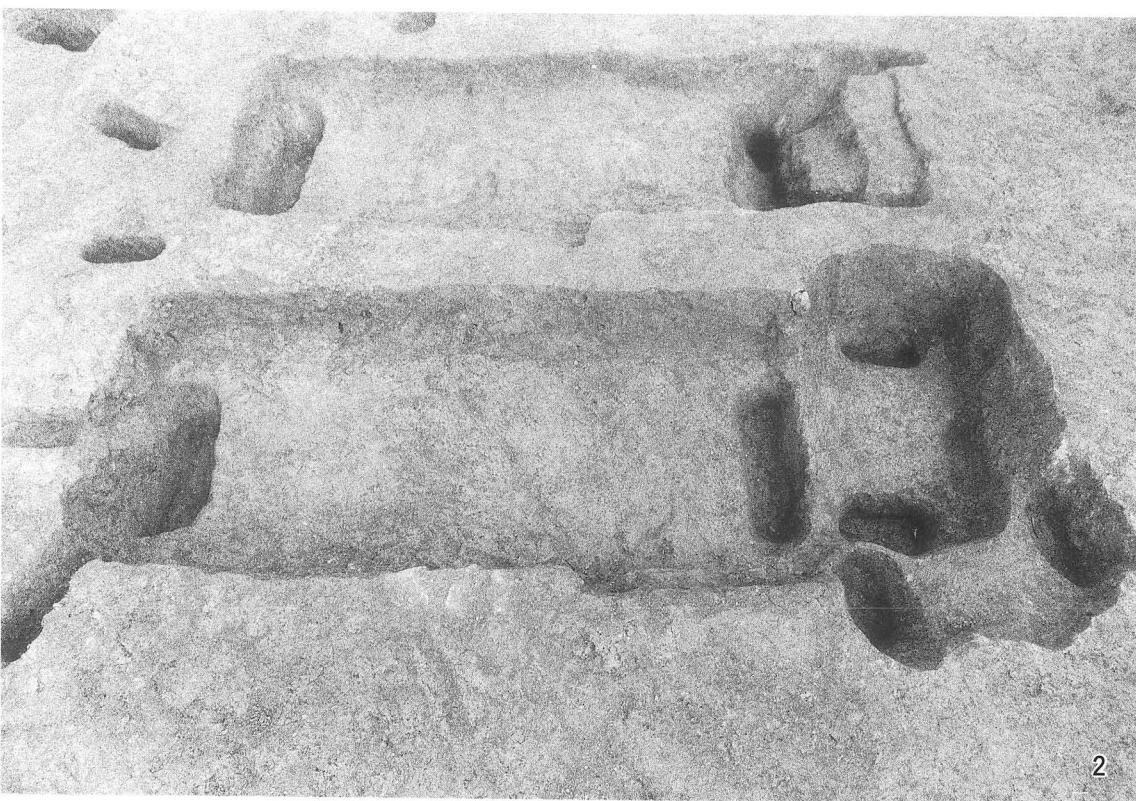


土壙墓11（南東から）

図版 9



土壙墓 1 (北東から)



土壙墓 5～8 (北西から)

図版10



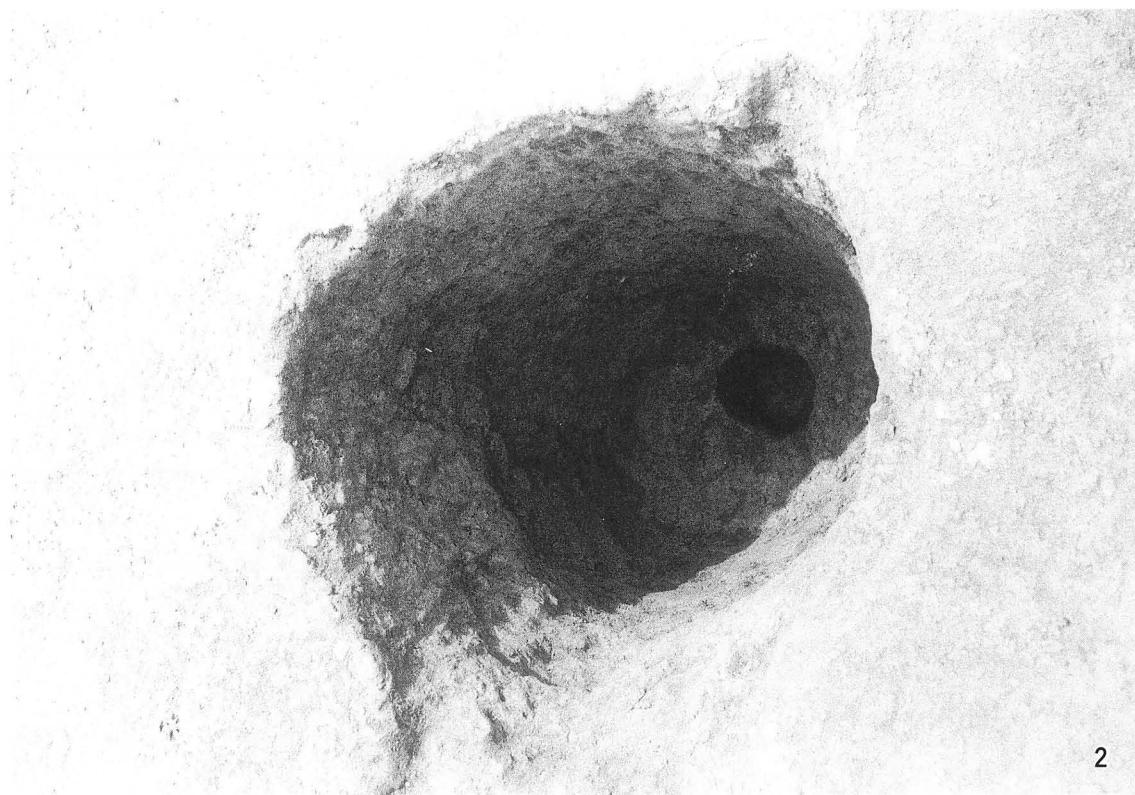
土壙墓18（北から）



土壙墓19（北から）



土壤6（北から）



土壤7（東から）

図版12



1

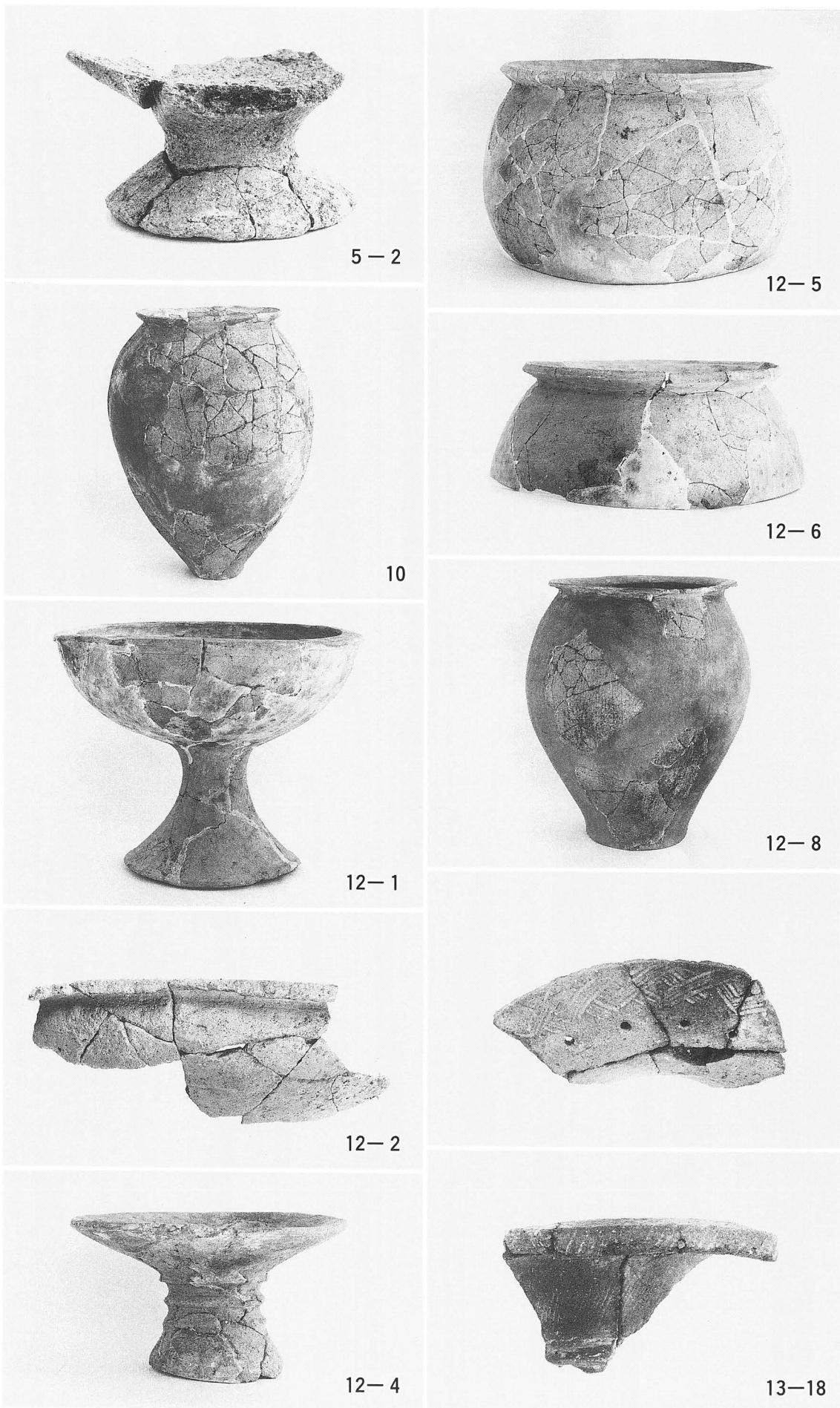
土壤8（東から）



2

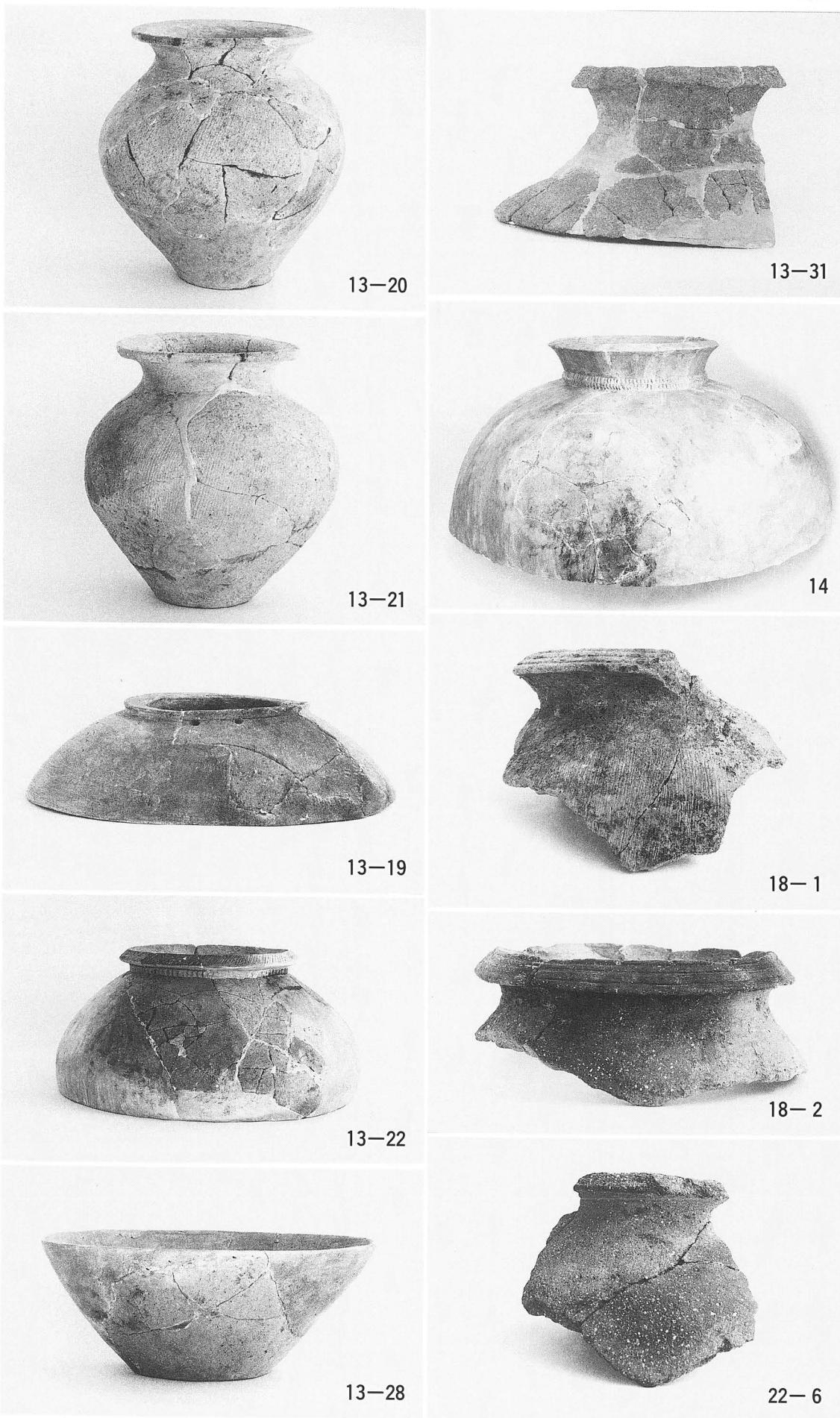
発掘作業風景（土壤墓群付近）

図版13

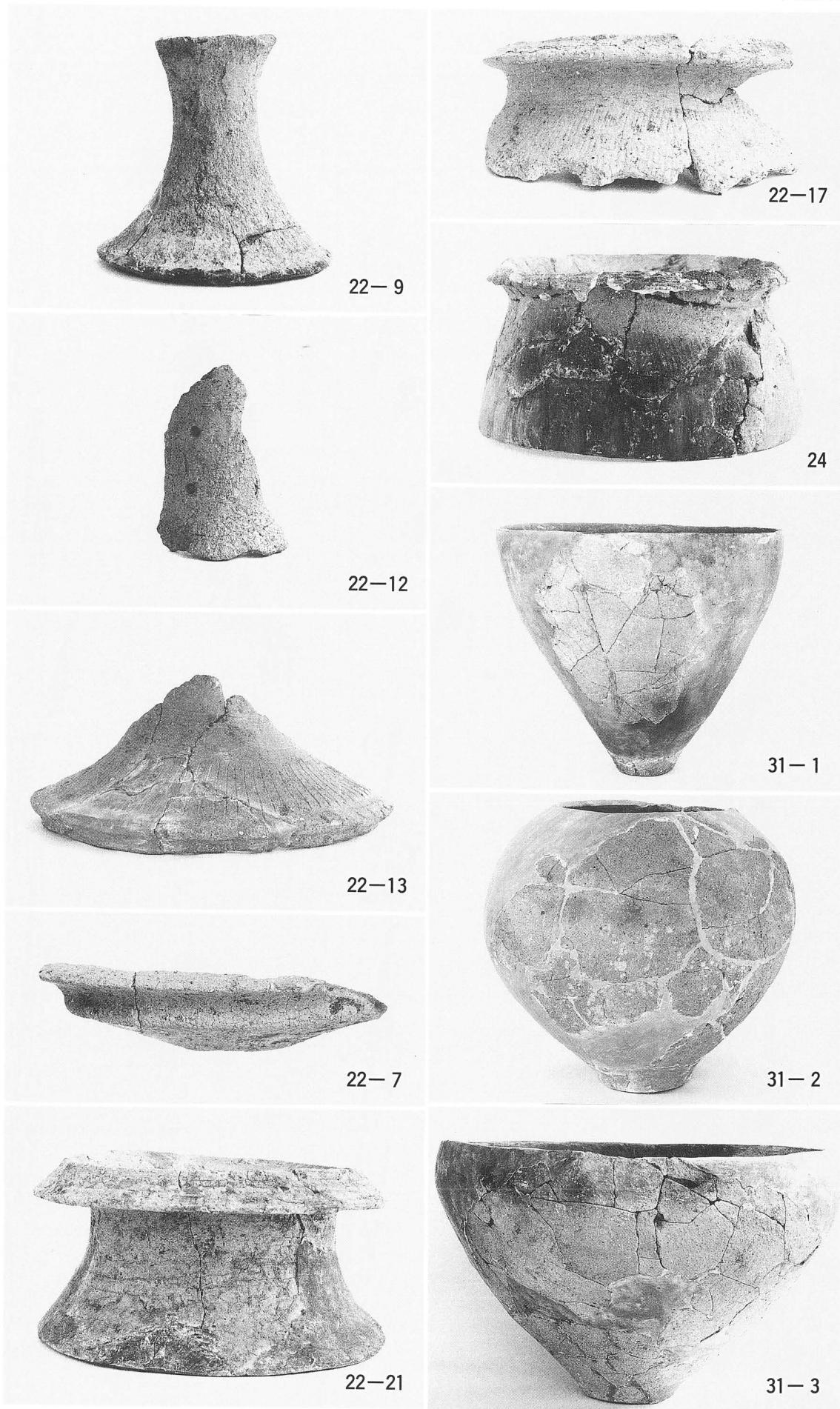


弥生土器（1）

図版14

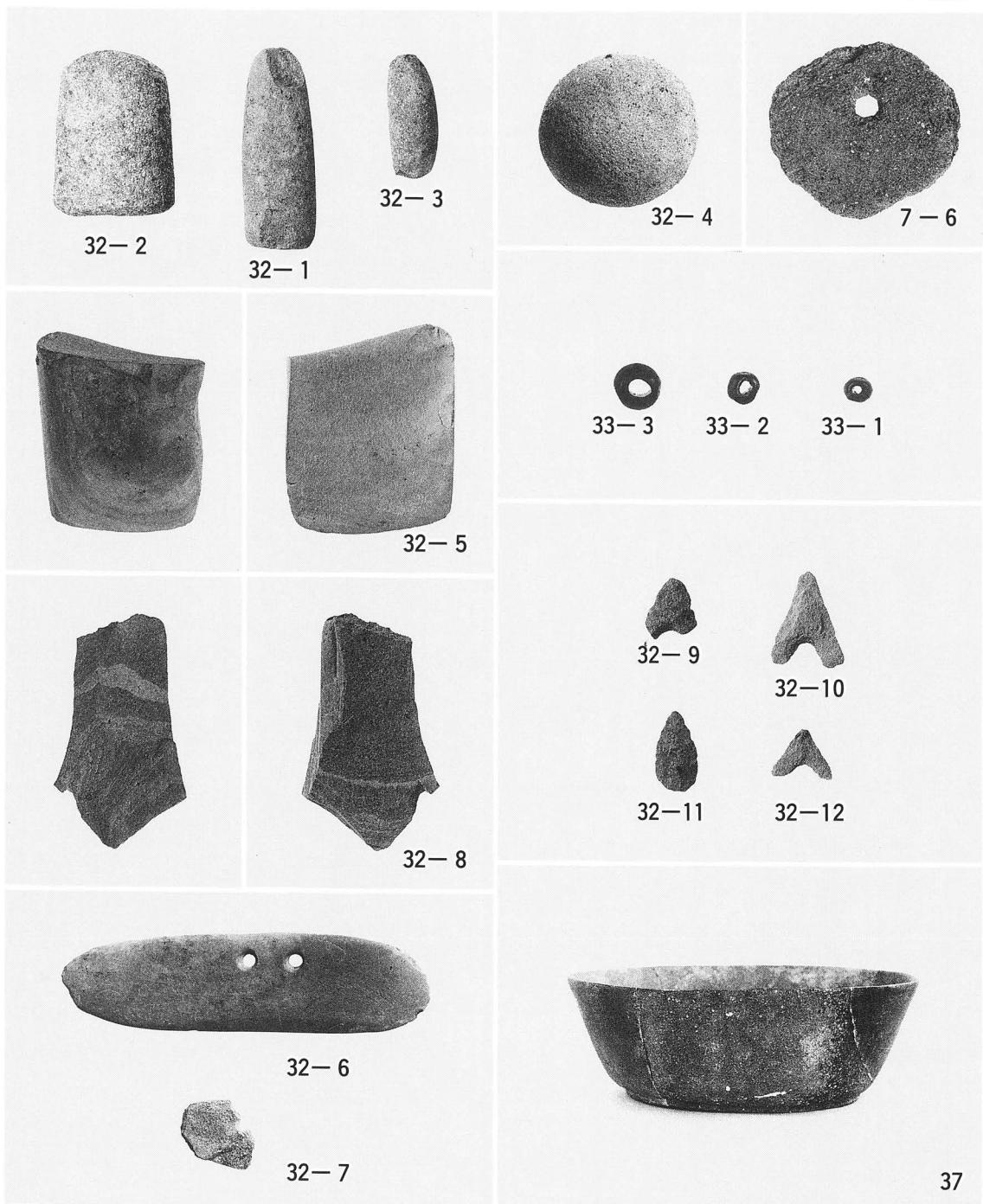


弥生土器（2）



弥生土器（3）

図版16



石器、土製品、玉類、須恵器

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	のむらたかおいせき							
書名	野村高尾遺跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名	津山市埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	第55集							
編著者名	行田裕美 平岡正宏 坂本心平							
編集機関	津山市教育委員会・津山弥生の里文化財センター							
所在地	〒708 岡山県津山市沼600-1				TEL 0868-24-8413 FAX 0868-24-8414			
発行年月日	西暦1994年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コ一ド 市町村 遺跡番号	北緯 。' "	東経 。' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因	
のむらたかおいせき 野村高尾遺跡	おかやまけん 津山市 のむら 野村	33203	35° 5' 3"	134° 3' 44"	19940601 ～ 19940712	4000m <sup>2</sup>	高野ニュー農 パーク建設に 伴う事前調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
野村高尾遺跡	集落跡	縄文時代 弥生時代 古代	土壙 堅穴住居址 段状遺構 土壙墓 土壙 焼土遺構 土壙	2基 4軒 3基 19基 5基 1基 1基	石鏃、他 弥生土器・石器・ガラス小玉 ガラス小玉 弥生土器・石器 弥生土器 須恵器			

# 雪村高尾遺跡

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第55集

平成7年3月31日発行

発行 津山市教育委員会

岡山県津山市山北520

印刷 株式会社 廣陽本社

岡山県津山市田町22